
旋律の夢幻回廊～インフィニティ～

駕籠の鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

旋律の夢幻回廊〜インフィニティ〜

【Nコード】

N4051F

【作者名】

駕籠の鳥

【あらすじ】

中学3年生の布石颯人はこの世界に疑問を抱いていた。くだらないのに皆が皆世界を愛し、成り立たせる理由それがわからなかった。だからこそ無関心でいた。そんなときだったある学園を見つける。だがそこは謎に包まれた学園だった。

零回廊 序曲（前書き）

少しづつですので投稿は遅いです。ご了承ください。

零回廊 序曲

世の中下らないことばかりだ。

世界なんてものは脆く朽ちやすいのにちゃんと成り立っていて、そんな中で人間は短い生涯を送っている。なら何故俺たちはこんな世の中を意味もなく過ごしている。意味はあるのかも知れないけど、俺の中では無意味なことだ。

日常に嫌気がさし、一種の現実逃避を始めたのは中学2年。それまでは学校に行くことが楽しみで仕方が無いといった頃もあった。あんな思いをしなければ俺は素直なやつだったかもしれない。

そんな廃れた俺だったがもう中学3年。先生に高校だの成績だの五月蠅くなりだした3年の夏、俺は体験入学とやらで見つけた。

この燕学園^{ツバメ}を。

殺風景な校舎に学園の側にある学生寮。

案内人の先生の話などそっちの気で、ただ耳から耳へ通していた。興味が一つもなく、無関心だったのになんだか不思議になった。

「わけわかんねえよ」

けなしているのに顔が笑っている。

最後に目に止った中庭の桜。

「まじかよ」

夏だと言つのにその桜は見事に咲いていた。

「不思議だろ。お前もこいよ」

在校生の声。

馴々しいが懐かしい。ふと思った。

（入学してみるか）

季節ハズレの桜が咲くここで俺は人生の意味を知ることになる。
だがそんなことは後にわかることなのだが。

第壱回廊 集合曲

3週間前なんの未練もないあの中学とおさらばし、この旭戯学園に入学した。

私立旭戯学園。

和歌山だったか三重だったかいや山梨だったかよく覚えてないが、全寮制の進学校にこの春めでたくもなく俺は入学した。

立地条件はどちらかと言うとまだいい方で瀋陽川しんやうを挟み、学校と町が別れている。

勿論町に行く生徒も少なくはない。

だから、学校外出は許可なく、出歩いていいが、寮が決めている時間に帰って来なければならぬと説明会でつまらない先生が言っていた。

外からの見掛けは一言で表すと貧相。

だが、そこに生徒が交ると華やかに見えてしまう。

そんな学園に唯一つ飾らなくとも美しいものがある。

それが旭戯学園のシンボルで、校章にもなっている、散らない桜。通称“天樹の桜”。

中庭の軽い丘に咲く桜色の大樹は誰にもなく威風堂々と立っている。霊的要素でも入っているのか誰も近寄ろうとはしない。

体験入学の時、彼に話かけた上級生以外は。

入学式当日にその人は桜の下で眠りこけていた。

自分もまた入学式の前に学園をウロウロとしている暇人でしかないのだが。

彼はポケットに両手をつっ込んで上級生の元に歩いて行く。

上級生の前まで行くと見下ろしながら話しかけた。

「おい。上級生がこんな所で居眠りしていいのか？」

彼に気付いたのか重たそうな臉を片目だけ開き、返事を返す。

「颯人^{はやて}か。別に俺自身に關係ないことだからな。この学園じゃ俺は人気者だからな。渾名^{あだな}で“愉快な道化師”と言われるほどだ」

身体を起こし、座りこむ。芝生を叩き、お前も座れと催促する。颯人は鼻で溜め息をつき、言われた通りに座る。芝生は柔らかく、上質な物だった。

「相変わらずだな凌^{しやう}」

「まあな。それよりこっちに入学したんだな」

「ああ。メンバーは魅菜^{みな}以外こっちに來たさ」

「魅菜が？何故だ！？アイツはメンバー以外と話せない極度の人見知りだろ！？」

これほどにない驚愕の顔をされる。この男のこんな顔を見るとは思っ
て見なかった。

「自立したいんだと」

「無理だ」

冷たく表情は悲しそうだった。

「アイツは俺たちに依存している。アイツが一人で生きることとは不可能だ。それは兄であるお前が一番分かっているはずだ。」

魅菜は颯人の双子の妹で、一卵性双生児で顔がそっくりなのだ。どちら顔かと言うと颯人が魅菜よりで、颯人は美少年なのだ。颯人が美少年なら魅菜も美人であることは言うまでもない。

「それは、分かるが……」

「アイツが自立するにはアイツ自身が強くならなければならない。だが、アイツには心が強い、尚且つ心の支えである兄がいる。兄であるお前がアイツから離れない限りアイツが自立することは不可能だ」

立て膝で座り、肘を乗せ上目使いで話す。

「……」

確かに凌の言っていることは確かだった。

いつも自分の後ろを歩いていたあの子がいきなり自立出来るはずがない。

世間体も基本しか分かっていない。常識だって表面上で知っているにしかすぎない。

魅菜が自立するには知識が少ないことは知っていた。

だが、何も決めることが出来なかった妹が初めて言った我儘わがままを自分はどうして止めることが出来ようか。

「かも知れないが、だが魅菜が変わろうとしたことは確かだよ」

「決意だけでは簡単に変わらない」

「……」。教室に行く。ホームルーム、始まるからな」

「それは1年だけだな。俺たちは今日から授業だ」

「ちゃんと出るよ」

「へいへい」

歩きだす。

名残惜しいが正直言って間に合わない。

初日から遅刻と言つのも気に食わないので少し歩調を速める。

「直にアイツは戻ってくる」

そんな凌の戯言も耳を傾けることもなく、自分の教室へと歩いて行った。

颯人の後ろ姿を見つめ、佇む凌。

飽きたのか桜を見つめ独り言を話し始める。

「どれだけ足掻こうと無駄なことだ。ここに来る生徒は皆、闇を持っている。誰かが助けなければ救えないほどの深い闇がある。この旭戯学園はそんな所だ。そんな中でお前が接してゆく友たちが強い闇を抱えている。お前は何処まで行けるのかな？」

西風が吹き、桜を散らせ、髪をなびかせる。

桜を見つめ、己の戦場である教室に足を運んだ。

凌と別れ1年2組へと辿り着く。

中では担任が話をしている。

遅刻したようで嫌な気持ちになる。

念のため上を見る。

（黒板消しはないな）

引き戸を開け教室に入る。

「すみません。遅れました」

「おう。ちゃっちゃっと席に着け」

「はい」

窓側2列目の前から4番目の席に座る。

「おい。どうした？授業に遅れるなんてどうした？明日は快晴だな」

「いや、凌と話していて遅れた。後な。どうしたと二回言ってる上に快晴じゃなくて雪な。快晴ならたいして変化ないぞ」

「そ、そこは流せ。俺が馬鹿に聞こえるじゃないか」

「安心しろ。琉杜^{りゅうと}、お前は馬鹿だ」

隣の身体168くらいの少年が声をかける。

彼、大橋琉杜は凌と同じで颯人の幼馴染みで、勉強より武道を重んじる格闘馬鹿。

一日中武道のことしか考えてなく、成績が救えないほど悪い。しかし、武道の知識は異常で全ての武道をこなすある意味化け物。

「え、以上。次の時間、さっき言った編入生紹介するから」

生徒名簿を教卓で叩き出て行った。

「編入生？」

「ホームルームの前半に言っていたんだ。編入生がくると」

「こんな時期にか？」

「珍しいやつもいたもんだよな」

颯人に話かけた青年は服部弘太。はっとりこうた

180cm近くの長身かつ、細身でモデルをやっているのではないかと思うほどののだが、実際は部活もやってはおらず、週末になると何処かに消えるという意外と謎が多い人物だ。

「でもよ。凌だったら面白いの一言で付きまといそうだな」

「そうだな。馬鹿」

「おう」

「何故に笑顔なんだ？」

「いやな、いつそう俺のチャームリングにしようてな」

思い更けるように腕を組み力説しだす琉杜。

弘太と颯人は目を合わせ肩を落とす。

「あのおな、琉杜。チャームリングではなくチャームポイントだ。少しは理解しろよ」

「ありや？ そうなの？ さっすが颯人頭いいぜ！」

「「お前がアホなだけだ」」

見事なシンクロで教室の一部で拍手が鳴り響いた。

「見る。貴殿のせいで人気者になっただろ」

「・・・大丈夫。そんなことしなくてもあなた達はすでに人気者だから」

か細い声が、ハッキリと聞き取れる声が聞こえた。
颯人たちの隣には小柄で清楚な少女が立っていた。

少女は見た目弱々しいのだが髪的美しさ可憐な顔立ちから神聖な何かを表していた。

「くれは紅葉」

少女の名は夏目紅葉。

中学まで一緒にいたなかで唯一の常識人。

暴れ出す他メンバーを抑える役目も颯人と共に彼女がおっていた。
普通なら怒り出すところだが、彼女自信がおっとりとしているせいかそのような自体にはなっていない。

「それよりどういうことだ？ 拙者たちが人気者というのは」

「・・・まず颯人は神童クラスの頭脳の持ち主」

「ふむ」

「・・・弘太は自分を拙者、第1人称を貴殿と呼び、部活に入っていないのには抜けた運動神経」

「ほう？」

「俺は？俺は？」

目を輝かせ、期待に胸膨らます琉杜。

まず琉杜なら武道家とか馬鹿とか名前が珍しいくらいだろうか。琉杜をマジマジと見てしばらく経ち、口を開いた。

「・・・・・・・・・・武道馬鹿」

場が固まる。

周りは『すげえ！短刀直入だ』とか『夏目さん。もの凄い勇氣ある』などとざわついていた。

自分を指差し、固まった琉杜は自分の後頭部を抑え絶望していた。

「うおおおおー！！なんで俺だけ間が開いてさらに一言なんだああああー！！！！」

「はーははー！！まさに琉杜を示しているじゃないか！」

「弘太。笑い、すぎ、だ・・・・。ブハッ！！！！あーはっははははー！！！！」

「・・・・・・・・みんな琉杜に悪いよ。クスクス」

「うおおおおおおお！！紅葉にまで笑われたぁー！！！！いつそ
う殺してくれええ！！！！」

紅葉にまで笑われたと言うが琉杜が紅葉を好いているわけではなく、
紅葉は本当に笑わない。常に表情を読み取ることが出来ない。
人はそれを無表情と言う。

そんな彼女を笑わせることは物凄いことだった。

「紅葉を笑わせるとは見直したぞ！」

「そんなんで見直されても嬉しくねえよ！！！」

のたうち回る琉杜。

とたんに起き上がる琉杜。

その瞳は明後日の方向を向いている。

「どうした？」

「今日から頭、よくするっ！！強くて頭もいいスツテキな男になる
！！！！」

決意のガッツポーズ。

その後、颯人を見て肩を掴む。

だが、颯人の方がちょっと高いのでなんか情けない。

「頼む！神童クラスと言われているお前しかない！どうすれば頭
がよくなる！？」

「そうだな。まず予習で3時間、復習6間。授業は寝るな。真面目

に受ける。休み時間も予習復習を欠かすな。そうすればさすがの前でもよくなるだろ」

「ううゝ、っう」

そのままの状態で苦しんでいた。

「……颯人。駄目だよ。琉杜がそんなに勉強したら天地がまたくつつく」

「そう、だな。そうなればギルガメシュに悪いな」

そうしているうちにチャイムになる。教室に担任が入ってくる。未だに琉杜は白くなっていた。

「えゝ、それではさっきの時間に言っていた編入生を紹介する。入りなさい」

「はい」

扉を挟んでいるせいにか少し低めに聞こえる。

ガラッ

扉が開く。

腰まで届くポニーテール、美人と言える顔つき。それなのに色っぽさを感じさせないぐらいの幼稚的な笑顔の美少女だった。教室中から聞こえる歓喜の声。

「入学前に編入してきた布石魅菜です。よろしくお願いします」
ガタン

机が倒れる音がした。

その発生元は颯人だった。颯人は魅菜を指差し口を開けていた。指している手は震えていた。

「み、み、魅菜!」

「あつ、兄さん」

『なーにー!!!』

教室中の声が歓喜から驚愕に変化した。

クラスの視線など目もくれず、魅菜と話を続ける。

「な、なんで!? 独り立ちするんじゃないのか?」

「始めはね。でも一カ月間独りで生活してみても駄目になって、そしてこここの編入試験受けてた」

笑顔で言っただけ。

それに対し額を抑え、呆れる颯人。

「よっ」

「あつ、琉杜。久し振りいゝ! 相変わらずの馬鹿面だね」

「へ、ありがとうよ」

「馬鹿にされてんだよ」

「ありや? そうなの?」

「結局貴殿も来たのか」

「うん。弘太も元気だった？それよりその拙者とか貴殿とかまだ直してなかったんだ」

「まあな。これは拙者の持ち味でござる」

とりあえずということで、颯人は弘太を引きずり、教室の端まで持って行った後、無残な状態になるまで踏み付けていた。

その様子を魅菜は頬を掻いて見ていた。

その反対側の裾を引っ張られた。

そちらの方を向く。

そこにはおっとりとした大和撫子がいて、顔を見つめていた。

その人物を見た瞬間に魅菜の表情に花が咲いた。

「……………来た……………っ!」

「紅葉ちゃん!ひさしぶりいゝ!!ほら、すりすりいゝ!!!!」

「……………」

魅菜は紅葉に飛び付き、頬と頬を擦り寄せる。眉をひそめ、少し嫌な表情をするが、頬を赤くして、抵抗しない所を見ると本当は嫌ではないらしい。

「あゝそこ。仲良いのは結構だが、そろそろ席に着けよ」

「あつ、はい……………えゝと……………私の席は……………」

「ん?ああ。布石のそこ。波風の隣だ」

担任が指したのは窓側3列目の前から2番目。颯人の1つ挟んで斜め前。

「はい」

ゆっくりと席に着く。他の戯れあっていたメンバーも席に着く。ただし、弘太だけは教室の端でのびていた。

「布石さん。私、波風皐。みかぜさつき よろしくね」

「あっ……うつ……。……」

「どうしたの？」

魅菜は困った様子で慌てふためていた。仕方がなく颯人が立ち上がる。

「ん？どうした？」

「いえ、私事ですので」

「そうか」

颯人は魅菜の元へ行く。

「ど、どうしたの？布石君」

「すみません。魅菜は極度の人見知りで、俺達以外と話せなくなるんです」

「へーそうなんだ。うん。オッケー」

右手でOKサインを作る。
頭を下げ、席に着く。

「お節介じゃねえのか？」

「……………最後かも、しれないからな」

「？」

教卓を叩く担任。

生徒全員が前を向く。

「えー、今ので分かったように、布石颯人と布石魅菜君は兄妹だ。
皆よろしくしてやってくれ」

担任の簡単な紹介が終わる。

「先生！質問！」

ある女子生徒が元気よく手を上げた。

「ん？なんだ？」

「先生の歳は？」

「今はそんな授業ではないのだが……………まあ、かまわんか。歳
は25。未だ未婚、彼女募集中。趣味は釣りとパソコンいじり。特

技は全ての解体。他に聞きたいことは？」

「はい!!」

隣の琉杜が手を上げる。

琉杜の質問は珍しい。

「先生の名前は？」

いくらなんでもそれはない。

まだ一日しか経っていないとは言え担任の名くらいは覚えておくのはセオリーである。

「お、大橋……お前……。後で職員室来い。みっちり教えてやる」

担任から負のオーラが見えた。それを察したのか流石の琉杜も訂正した。

「じよ、冗談ですよ。渡辺^{わたべしんろう}迅雷先生」

少しだけ雰囲気や和らぐ。担任の渡辺も鼻息をついた。

「冗談か。焦らせるなよ。えゝ、では午後から授業に入るぞゝ。次の時間は授業の担当と授業内容を発表するからなあゝ」

悲哀の声を浴びつつ担任渡辺迅雷は悠々と立ち去った。

ホームルームが終わり、いつものメンバーが集まる。

「懐かしいね。こうやって皆で集まるのって」

「そうだな」

「・・・颯人、まだ怒ってる？」

「少しな」

「なんだ？まだ怒ってんのか？ちまちました奴だな」

「そうだぞ。来てしまったのは仕方ないだろ」

「来ることに怒ってる訳じゃない。俺が怒ってるのは兄妹である俺になんの相談も無かったことを怒ってるんだ」

意外な言葉に皆目を丸くした。

まさか颯人からそのような言葉が出るとは思っても見なかった。

魅菜の事を守って来たのは皆知っているが、そんな拗ねるような態度をしたのは初めてだった。

「貴殿、そのような人物だったか？」

「違う！絶対違う！！こんなの兄さんじゃない！！！」

「全否定かよ」

腕を大きく振り絶対的な否定を魅菜なりに表していた。

「まあ、いい。それは置いといて」

「置いとくんだ・・・」

颯人の切替えの速さはかなりのモノで神懸りのだった。

「もう一人いない」

「一人？・・・ああ凌か」

このメンバーを集め、色々としてかしたある意味の首謀者。

実際は首謀らしいことはやらず、学校中の教室に黒板消しトラップを仕掛けたり、廃棄予定の机を引っ張りだしナスカの地上絵を描いたりと可愛らしいものだ。悪ばかりかと言えば、そうではなく、学校の清掃活動を行い一日中掃除したり、壊れている町の備品を直したりとよい事も行なったりと町の人達からは『お茶目な反抗演奏者』と有名だった。

「アイツがいなきや俺達じゃねえ」

「それは勿体ない言葉だな」

廊下から聞こえる凜とした声。

紛れもなく湊凌本人だった。

凌は堂々と自分の教室であるかのように歩いて来る。

「やっと集まったな」

凌は近くの椅子を引き寄せ座る。

「このメンバーで集まるのも久し振りだな」

「今まで凌いなかったからね」

「…………。うおおおお！そうだ！！お前らがいない間どれだけ寂しかったことか！！」

「…………出た。いつもの凌馬鹿節」

「これも久しいな」

「だね。こうなると凌って琉杜以上の馬鹿だから」

「魅菜！おめえそれはどういうことだよ！！！！」

「そのままの意味」

「クツ、理解できねえ」

「アホだ」

この6人が揃うと異様に騒がしくなる。

この6人の特性なのかもしれない。

上級生の凌がいるにも関わらず普段と同じように過ごすクラスメイト達。普段と言ってもまだ1日しか経ってはいないのだが。

「それよりさっきの寂しいって嘘だろ？俺たちがいない間、四天王として君臨したという噂が入ってるのだが？」

「……………」

黙り込み、冷や汗を流す凌。そんな凌を見て弘太が聞く。

「なんだ？その四天王とは？」

「あれだろ？知ってるかどうかだろ？」

間を割ってくる琉杜。

「なんでそうなるの？」

「知ってんのー！からだ」

「見事だな」

「ああ」

凌と颯人だけが発言し、皆呆れていた。

「……。琉杜の馬鹿話しは置いて、どういふこと？」

「紅葉ちゃんつてときたま凄いと思う」

「置いとくなよ！」

「いや、この学校には7つの怪談たらぬ7つの伝説がある」

「流すなよ！」

「うっさい！」

「うっ……ごめんなさい……」

魅菜が琉杜の脇腹に拳を入れていた。中学の時も何度かいや、しょっちゅう脇腹に入れられていたせいで琉杜の脇腹は全身の中で一番強化されていた。

「続けて兄さん」

「ああ」

「……魅菜ちゃんには負ける」

「こいつ俺達の時のように他に3人を巻き込んで色々やっていたらしい」

「また？しつこいね」

手の甲を腰に置き、呆れる。だが、凌には効いてないようで爽やかだった。

「勝手に言っればいいさ。一つも効かないぜ！」

胸を張って言い切れるので、他5人は攻めてみた。

「あの頃は酷かった。こちらは実行班でも企画班でも無かったのに凌だけ逃げて俺たちばかり怒られてたな」

「ぜんっぜん、平気だぜ」

「確かにな。こっちは乗り気じゃねえって言ってるのに引っ張られて酷い目に合うのは俺たちだった」

「はっ！・・・平気さ」

「うむ。で緊急と言って呼び出されてみれば、結局つまらぬことだったり」

「・・・平気・・・さ」

「全てにおいて凌だけ無罪放免だから結構、ね」

「・・・」

「・・・最低」

「うああああああ！！！！」

ショックのあまり転げ回っていた。

「よし、これで皆揃ったな。これでまた暴れることができる」

「・・・まあ、ほどほどにな」

呆れてはいる颯人だが実際は嫌ではない。他のメンバーも同じ心境だろう。呆れるくらいどうでもいいことだが、癖になるくらい気持ちが悪く踊る。いつもそうだった。下らないことを提案し、だがそれは下らないほど楽しかった。凌が中学を卒業して、真似して5人で馬鹿騒ぎをしてみたが楽しいという実感が沸かない。そんな時いつも思っていた。凌は凄いのだと。だから凌の言った通りこの6人で何か出来ると思うと感情が高ぶるのも分からない訳では無かった。だからこそ皆凌を完璧に征し、止めることは無いのだ。

「四天王で暴れるのも悪くはなかったがやっぱお前らと騒ぐほうが
ワクワクするぜ!!」

子供のように遊ぶことを楽しみにしている笑顔。颯人たちもそれは
同じだった。2年の半ば凌が進学活動に忙しくなると日常がつまら
なかった。だが、そんな日常も今日で終わり。これからはまた待ち
遠しい日々が始まる。

「皆行くぞ!!!」

「『『『『』』』』』」

意気揚々と威勢を上げるが鐘がなる。

「……授業始まった」

「やべえ!次、移動教室だ!!」

凌は完全疾走で教室に戻った。皆は思うが、颯人が代弁した。

「……哀れだ」

クラスメイトが次々に席に着き始めると担任が入ってきた。

「湊は授業に遅刻決定だな。次の湊のクラスは五十嵐先生だったな。
南無」

無惨な台詞を残し授業に入った。

授業が終わり、琉杜が直ぐさま寄って来た。

「学食行こうぜ」

「それは構わないが、場所は空いてるのか？聞けば開始3分で一杯らしいが」

「問題ない」

後ろの席で凌の声がする。後ろを見ていることを確認した。凌はちやっかりそこにいて、ウインクをしてアピールした。

「さて、どうする？」

「待て待て！……無視するな！……」

目を細め質問する。

「なんだ？一体。勝手に人の教室に入りこんで」

「さつき学食の席の話をしてたろう？それが問題ないと言っている」

さあ行くぞ、と食堂へ向かう凌と渋々と付いて行く他メンバー。食堂に着くとそこは異世界だった。中々広い食堂には半端では無い数の人ばかりが出来ていた。凌はその人込みを縫うように抜けて行く。颯人達も凌の後ろにいたが、凌ほど上手く渡れ無かった。唯一颯人だけは凌と同じように人込みを苦もなく抜けて行った。不思議な事に食堂の中央部には周囲よりは生徒が少なかった。その中で空いてる席が6つあった。凌は迷いもなく席に向かった。近付くと一人の

上級生が肘より上だけ手を揚げた。

「遅かったな。待ちくたびれたぜ」

「すまない。幼馴染みを誘うのに手間取った」

話をしながら凌は左手で皆を呼んだ。5人は顔を合わせ席に着いた。

「あんたたちか、凌がよく話す幼馴染みは。俺は向井。凌と同じ四天王だ。そしてそこにいる2人も四天王だ」

隣の2席を指す。そこにはツンツン頭の上級生と眼鏡をかけた上級生がいた。颯斗は眼鏡の上級生が気になった。

「どうした？」

弘太に話しかけられた。

「いや。何でもない」

「まあ、他の四天王の説明は後ほど。コイツらの紹介はいいよな？」

「ああ」

「……………」

向井は返答し、ツンツン頭上級生は1つ頷き、眼鏡上級生は眼鏡を上げた。

「よし。それより飯食おうぜ！！飯！！」

凌は真っ先に人込みの中に突入した。

「紅葉ちゃん。私たちも行こうか」

「・・・うん」

「では拙者たちも行くか」

「おう」

「ああ」

他5人も騒いでいる凌の元に向かった。

「一つ気になるだが」

食事しながら颯人が聞いた。

「この食堂はなぜ中央部がこんなに空いている？しかも2年生ばかりのような・・・」

「ばかりじゃなくてだけ、なのさ」

凌の代弁するように話す。

「2年生に有力者が多いからだろうね。生徒会、委員長の半数以上、そして四天王。3年生の有力者は生徒会の副会長と残りの委員長、

後、寮長ぐらいだろ」

「何故ですか？本来なら逆なのでは？私の世間論ですが」

それを聞かれた途端に向井は辺りを見回した。そして5人にしか聞こえないように話し始めた。

「じゃあ一つ聞くけどお前たちこの2日間で3年生見たか」

「そりあ見るでしょ。だって……ありや？3年生いたか？」

腕を組み、考え込む琉杜。流石の琉杜でも気付いたらしい。そう、自分達は一回も3年生に合ったことがない。いつも出会う腕章は2年生の緑と1年生の青。だが3年生の色である赤は見た事が無かった。そのうち黙っていた凌が話しかけた。

「今の3年生の人数は俺たちより遥かに多い。だが、四天王である俺たちでさえ会うのは生徒会と寮長、少しの委員長格だけ。なら他の3年生は何処に消えたのか？」

「元々いなかったとかじゃないの？」

「いや、現に俺たちは3年生の顔を知っている。だがそれは2年生までのこと。3年になった途端消えた。……不思議じゃないか？」

「……だから四天王を作ったのか」

「ご明察。さすがは颯人だな。神童クラスは嘘ではないらしいな」

「・・・なんで作ら必要があつたの？凌なら一人で解決出来そうなのに」

「俺だつて完璧じゃない。それに探すな一人よりも大勢がいい」

自信を持って発言する凌。他のメンバーは当たり前前すぎて反応はない。ちよつとだけ寂しいと思う凌だった。

「これからはこの9人で探す」

この発言にツンツン頭上級は眉を上げ、席を立つ。

「どうした？」

「下りる」

「は？」

凌は口を開け、固まる。

「1年の頃騒ぎすぎた。今年は静かに過ごす。だから下りる」

食堂を後にするツンツン頭の上級生。

「おい！草薙！！」

「・・・だな。悪いな凌。俺も下りるわ」

「向井もか？！」

向井も草薙を追うように食堂を去っていった。残った四天王は凌と眼鏡上級生だけ。凌は不安げな表情で眼鏡上級生を見る。眼鏡上級生は凌をしばし見つめた後、眼鏡を上げ食堂を去っていった。

「凌……」

寂しげに凌を見る魅菜。だが、そんな心配を余所に凌の顔は楽しそうだった。

「まあいいさ。お前達がいるからな」

「うん」

「そうでござるな」

「ああ」

「そうこねえとな」

「……凌に戻った」

「でどうすんだよ。チーム名はよ」

「いらん」

「いや、ここは昔のように付けるべきだ。チーム名はそうだな……
・・イノセントチルドレン……!」

「抜ける」

ノーセンスなチーム名を聞いて真剣に拒絶する颯人。

「長かったお前たちとの付き合いもこれで終わりだ。ではな」

上級生のように去ろうとする颯人。急に走り出す魅菜。

「この馬鹿兄貴ー！！！」

「ん？ゴフツ！」

颯人の背中に魅菜の拳がめり込み、颯人はその場に倒れた。

「なんで素直になれないの！本当は嬉しいくせに！！ねえ！聞いているの！？」

倒れたまま動かない颯人。もう一発入れようとして蹴りの構えにはいった魅菜を弘太が止めた。

「魅菜。颯人は聞いてない訳ではなく、気絶してるだけなのだが・・・」

「えっ！？そうなの？・・・キャー兄さん大丈夫！？」

慌ててしゃがみこむ魅菜。

「なあ、アイツにお前の拳は危険だと教えたほうがいいと思うか？」

「糖分だぜ」

「・・・当然だから」

結局颯人は魅菜の拳で、三途の川から帰ってきた。帰還した後颯人は魅菜に厳重注意を言いつけた。

「寮の部屋割り張っておくからちゃんと確認しとけよ」

担任渡辺が掲示物専用の壁に紙を張って出ていった。クラスメイトたちは我先に見に行く。これから一年共にする部屋なのだからない訳がない颯人たちも人込みを掻き分け掲示物に目を通す。部屋の割り振りは男子寮188号室大橋琉杜・服部弘太。190号室布石颯人。女子寮120号室夏目紅葉・布石魅菜。

「キャー！紅葉ちゃんと一緒だー！！よろしくね！」

「・・・うん」

嬉しくて喜びを隠せない女子組。対して男子組は全くの逆だった。

「コイツと一緒にかよー!!」

「うむ。よろしく頼むぞ琉杜」

「一人部屋か・・・。つまらん」

顔をしかめる。不服には不服だが一人部屋も嫌いではなかった。

放課後イノセントチルドレンの面々は颯人たちの教室に集まった。集まったというより凌が勝手に颯人たちの教室に來ただけなのだ。

「で、こうやってみんなが集まった訳だが。何をするんだ？お前のことだ。3年を探す他に何かやる予定なんだろう？」

「……」

凌はその言葉を聞いた瞬間に目を細め、睨みつけてきた。まるで自分より強い敵を見つけた蛇の威嚇のように。だが、目を閉じた。颯人にのしかかっていた重圧がいつきに消え去った。

「そうだな。確かに＋がないと俺たちじゃないな」

「……考えて無かったんだね」

「悪いか？」

「こやつ確信犯か？」

「分からんが、言えることが一つある」

「何？」

「琉杜。型はもう止めとけ」

授業中は死んでいる琉杜だが、放課後になると急に立ち上がり、型を組み始める。それが琉杜の特性でもあった。端から見ればかっこいいのだが傍にいれば暑苦しいこのうえないのだ。

「なんだよ。これからって時によお」

「うざい」

「今度はなんの型なの？」

「こら魅菜！続けるな！！」

「中国拳法の八卦掌だ」

ついに国を抜けた。外国拳法の始まりは八卦掌らしい。

「琉杜。少しはおとなしくしたらどうだ？」

しばらくじっとしていたが、また暴れはじめ、雄叫びをあげはじめた。

「うるさいぞ！！大橋！」

遠くから生徒指導の先生が吠えた。

「・・・・・・・・」

無理なようだった。結局その日にはまとまらなかった。

ここは男子寮の颯人の部屋。

一人部屋だが、かなりの大きさがある。颯人たち6人が入ってもまだ余裕がある。その部屋には立派な卓袱台が設置されており、6人はそれを囲んで座っていた。

「で、俺たちは何をするんだ？」

「・・・お前たちはこの学園にある特別学園行事を知っているか？」
急にふるが誰として驚きはしない。だてに小さい頃から幼馴染みを
やってはいない。信頼感や友情はそこらにいる親友には負けないと
一人一人が思っているが、それは長所であり、短所。6人全員が依
存してしまい、魅菜のように極度の人見知りになるのだ。
ひとまずそれは置いておこう。

「アレだろ？1ヶ月に一回の周期に行われる何とかカツコウだろ？」

「周期なんて答える琉杜に感動した俺が馬鹿だった」

「ああ、全くだな。最後の最後にやられたな」

颯人と凌はいつきに底辺に落とされていた。

「まあ、仕方なからう。琉杜の馬鹿に期待しても無駄であろうて」

慰め程度に琉杜を侮辱しつつ弘太が颯人の肩を叩く。

「ああん？なんだよやんのかよ！」

「上等だ。やってやろうじゃないか！」

「止め・・・！」

「うつさい！！ここで暴れるな！兄さんに迷惑でしょー！」

魅菜が弘太と琉杜の間に入り、空中開脚蹴りを弘太の胸と琉杜の顔
面にくらわしていた。

「うつ・・・、面目ない」

「・・・・・・・・」

胸に蹴りを入れた弘太は謝ることが出来たが、顔面に食らった琉杜は白目を向いて立ったまま気絶していた。

「・・・あの2人にかまっていたらきりない」

「だな、凌、続けくれ」

「ああ。カッコウじゃなく。合戦だな。旭戯学園には他にはない行事として、旭戯学園合戦がある。それに参加しようと思う」

「待て、簡単に言ってくれるな。俺たちはこの学園に入学してまだ2日だ。合戦だって説明会でしか知らない。詳しい情報を与えるべきだ」

「・・・・・・・・うん」

「確かにね」

3人の意見は一致していて、弘太は無言で頷いて自分も同意見の意思を見せた。琉杜は今でもまだ死んでいた。それを紅葉が呼び戻した。

「・・・琉杜。帰っておいで」

「ん？おお、新たに見つけた川を泳ぎきるところだったぜ」

「こやつ三途の川を泳いで渡ろうとしたのか……」

今死にかけていた琉杜に説明をし、同意見を得た。

「まずはそれからか。旭戯の合戦は10〜30人の間でチームを作り、2組みで戦を行なう。しかも、一回の合戦には2組だけ参加資格を獲得することが出来る。つまり例でにするなら赤対青でその月の合戦は終了する。格チームには駒と眼鏡が与えられる。駒には特殊技術が組み込まれ、使用する生徒は眼鏡をかけ、駒を操る。リアルタイムホログラムってやつか？それで敵の王を打ち取れば終了」

「チェスや将棋みたいなものの？」

「それとはまた違う。第一駒の性質が違う。駒は全部で6種類ある。王、参謀、騎士、傭兵、祭司、魔術師となっている。原則として王と参謀は一人だ。他は何人でもいい」

「……何で一人なの？」

「おそらく王と参謀は要であり、統率者。そんなのがごまんといったら、皆が混乱するからだろう」

「颯人の言う通りだ。他に質問は？」

全員が手を上げる。

「ビックリだぜ」

「……対戦相手は？」

「2年及び一部の3年」

「戦闘能力の基準は？」

「月終わりにある小テストと簡単な実技試験」

「琉杜の質問はなんだ？」

「意味が分からん。1から説明してくれ」

どうやら凌の説明は琉杜にとって難易度が高いらしかった。見ればいつの間にか横になり、腕だけ上げている格好になっていた。仕方ないので颯人がノートを取り出し、図を用いて分かりやすいように説明をしていた。それを聞いていたのは琉杜だけでなく、魅菜、紅葉、弘太も聞いていた。どうやら凌の説明で分かったのは颯人だけだった。そのことを理解した凌。

「………ショーーック!!!!」

扉を勢いよく開けて飛び出した。

「凌、出ていったよ」

「アイツなら問題ない。続ける」

「貴殿、いい度胸してるな」

廊下から走ってくる足音。足音は颯人の部屋前で止り、足音をたてていた人物が開きっ放しの部屋に入ってきた。

「ゼエ、ハア、ゼエ、ハア・・・誰か止めるよ！！！！」

「言っただろ？問題ないって」

「・・・・・・」

ある程度の時間が過ぎ、外出禁止の時間になり、颯人と凌以外のメンバーは自分たちの部屋に戻っていた。いつもはかすかにしか鳴らない秒針も今夜に限り、大きく響く感じがした。

「人を呼び止めといて何も話さないのは無礼ではないのかな？」

「その話し方止める。・・・・・・何を知っている？」

「何のことだ？」

「惚けるな。あんたは魅菜がこの学園に来ることを知っていた。つまり、予知夢か何かをしないと普通分からない。確かにあの魅菜ならこうなることは予測出来たかもしれない。だが、それは憶測にしかすぎない。それでもあんたは肯定した。これは原因がないと出来ない意見だ。これも憶測だが、あんたはこの１年で皆が知らない何かを見つけた。違うか？」

「近からず遠からずつてとこだな。お前ほどになればここまで予測出来るだろうとは思っていたが、これほど早いとは思いつかなかった。だが、お前は根本的に間違っている。それに気付かない限りお前はその謎を解決することは出来ない」

部屋を出ていく凌。

戸が閉まって行く。扉が完全に閉まり、足音が遠ざかる。卓袱台に

拳をぶつける。

「なんだよそれ。意味が分からん」

秒針が嘲笑うかのように颯人の部屋に木霊した。

世の中のほとんどは不条理だつたりする。だが、この学園にはそれは関係ない。条理を説かなければ道は進まない。この学園の秘密。それは……闇。

第貳回廊 独鳴曲

清々しい朝を迎えたが、颯人は憂鬱だった。

頭の中は混乱していて、考えることが出来ない。実家から持つてきた壁時計を見る。そろそろ皆が食堂に集まる時間だった。壁にかけてある制服に袖を通し、食堂に向う。

奇妙なことに通り道は知り合いは一人もでくわさなかった。いつもなら嫌でも会ってしまうのに。

「おはよう諸君」

朝の食堂での挨拶は凌のうざったい一言から始まった。

「おつす」

「うむ、おはよ」

「・・・おはよ」

「ちゃー!!」

「おはよう」

昨日座った席に着く。

隣の席を見るが、そこに向井氏たちつまり四天王の姿はなかった。当たり前だ。昨日のうちに四天王を抜け、普通の学生生活を送る態度で示されたのだから。四天王を作り、そして解散させた張本人である凌は爽やかに何事もなかったように輝いていた。

昔からそうだった。人を巻き込むのに急に突き放し、何事もなかった

たように接する。それが颯人にとって理解しがたいことだった。更に、巻き込まれた人間は決して凌を責めたりはしない。颯人の一番の謎だった。

「さて、それでは今日からの活動の内容を発表する。・・・ジャラララララララララ、ララン!!」

「・・・メンバー集め」

「俺の台詞があああああああははあん!!」

「今日一日で見つかるとは思えないが・・・」

「やれるだけやってみようか!!」

「ところでよ。アレどうする?」

琉杜が暴れている凌を指す。

「無視」

「うむ」

「応っ!」

「・・・うん」

「OK!!」

5人揃って食堂を出ようとする。それに気がついた凌は走り、颯人

の肩を掴み、叫ぶ。

「無視するな！少しはつつこめよ！！悲しくなるだろ！！！！いつからそうなった颯人おおおお！！！」

「五月蠅い。黙れ。ウザイ。消えてくれ」

「……………。うおおおおおお！！！！！」

嘆き叫びながらかけて行く凌。

「颯人ってよお。時たま残酷だよな」

凌の姿が見えなくなるまで見つめていた。

凌を追う為に歩く。一方凌は曲り角に隠れ、驚かそうと狙っていて、計画通りに実行したのはよいのだが、それに驚いた魅菜から瀕死の一撃を食らった。

渡り廊下を渡る途中に丘の桜が見えた。

（あの桜、何処からでも見えるのか）

どうでもいいことをふと思う。

自分たちの教室に入り、クラスメイトに挨拶をし、颯人の席に座る。集まってきたのは弘太と琉杜。むさ苦しい男だけのメンバーになった。紅葉と魅菜は女子の集団に混ざっている。積極的に混ざる魅菜だが、困惑し、結局颯人たちのもとへ駆けた。それを見た紅葉は詫^{わび}をいれ、魅菜を追った。

「こっち来たぜ」

「駄目だったか」

「先が思いやられるな」

魅菜が涙めで駆け寄る。

「やっぱり無理い」

「・・・魅菜ちゃん」

「ハア」

呆れて溜息しかでてこない颯人であった。

さて、今考えなくてはいけないことがある。メンバー集めだ。10人以上となっているので最低でも4人は必要になる。入学したばかりの彼らにはかなり厳しいものになる。まだコミュニケーションもとれないクラスメイトたちを誘うのは困難だろう。

「メンバー集めって言うてもよ、どうすりゃいいんだ？」

「確かにそうでござるな。皆どれくらいの成績かもわからぬと言うのに」

手をこまねく状態の時だった。急に話しかけられた。

「お宅ら何考えてんねん？」

関西弁だった。そこにいたのはニット帽をかぶり、薄手の黒マフラーを巻いている。制服と合わせると妙にあう。

「暑くねえのか？」

「もう慣れたわ。今はこのスタイルはワイのデフォルトや」

「暑い、は、慣れなのか？」

「人それぞれだろうな」

「それはおいといてな。で、さっきの質問の答はなんや？」

「人に質問する前に自分の名を話すのが条理ではないのか？」

「ワイの名って……自己紹介聞いてあられんかったんか？」

「すまぬ。颯人は自分の興味のあることに關係することしか聞かぬのだ」

「……なるほどな。そらおもろいわ。ワイの名前は荒谷葉磨あらいやま謙三郎けんざぶろうや。ワイを知つとる奴はヨウって呼ぶやつが多い。以上や。神童の布石颯人はん。もう一回聞くわ。で、さっきの質問の答は？」

「さっきの？……ああ、はいはいさっきの質問の答か。……いや、単純なことだよ。人が必要なだけさ」

普段ならありえないくらいの単略した颯人の答。それは何かの表れなのだろうか。

「ほ。なんやわからへんけど、人がいるんやろ？そんならワイはどうや？」

親指を立てて、自己をたてる。とても自信があるようだった。

「いいじゃないか。よかった……」

弘太が握手をしようとしたとき下方の方から冷たい声が聞こえた。

「素姓も分からん奴を仲間にするだど？」

皆が皆颯人に対して驚愕した。今まで颯人がこのような態度をとったことがあるだろうか。否、今までを見返してもこのような反応は初めてだった。

「……」

「な、なんやいきなり嫌われた？……まあええわ。気持ちちは分からんでもあらへんからな。その気になったら誘ってや」

片手を上げ、去る荒谷。それを見ていた魅菜は颯人を睨む。

「もう！なんでそうも嫌悪するの！！分かってるはずでしょ！」

む、と唸る魅菜。

颯人は半目で魅菜を見つめ、外を見る。青空が世界を覆い、太陽が照らす。太陽が照らせば日向と日陰ができる。そんな歪な世界に颯人は丁度真中にいる。場合によって光にもなり闇にもなる。天の邪鬼。颯人の性格の一部である。颯人はイノセントチルドレンの中で一番扱いにくい人物なのだ。

「分かってるさ。……分かってる」

「？」

興味はあった。学校にニット帽などがぶってくる奴はそういない。だから初日に調べた。人から人を聞いて歩き回って獲た情報は一つだけ。

孤独。

奴と同じ学校の人間は皆無。勿論この学園に友達と呼べる人間はいない。何故かは知らない。だけど一人だった。昼休みになると何処かに行ってしまう。今日は追ってみたくなった。琉杜たちの誘いを断り、荒谷を探した。荒谷を見つけることは簡単に出来た。荒谷のような奴の行く所など予測出来る。立ち入り禁止にはなっていないものの、誰とてこない屋上に荒谷はいた。荒谷はフェンスに指をかけ、西の方角を見つめている。

「なんでこんなところにいるんだ？」

「……颯人はんか」

こちらを見たがまたもとに戻った。荒谷の隣に立ち、同じ方角を見つめる。後に荒谷が話した。

「この方向にワイの故郷がある」

「知ってるよ。……恋しいのか？」

「逆や。あんな土地もう立ちとうない。……あの土地には辛さと憎しみしかないさかい」

「……」

「ワイも・・・昔は好きやった。あんなことさえあらへんかったら」

「何があつたんだ？」

「裏切りや」

それは冷たく、憎悪のこもった一言だった。

「この格好は裏切った友達の格好なんや。せやさかいワイは同じ格好になることで見せしめにしたんや」

「それならここにきて見せしめる対象はいなくなつたはず。それでもしているのは未だに後悔しているからじゃないのか？」

「・・・かもしれへんな。せやけどワイはもう友達を信じられんかもしれへんな。ワイ・・・友達いいひんのに」

こうして見ると判る。こいつも自分と同じなのかもしれない。何かを抱え、殻に籠ったままで救いの手を待っている。あの頃の自分と同じように。なら今度は自分が助けてみようと思つた。

「なら、オレらの仲間に入れ」

「は？」

「オレたちは裏切らない。オレらが教えてやる本当の仲間ってやつを」

「・・・なんなんや？さっきはえらい嫌悪しよつとつたんに急に心がわりしよつて」

「変に……あんたが俺に似てるから」

風が吹き、髪を撫で、頬を冷やす。少し俯く荒谷。黒のマフラーでその表情は詠みとれない。

「まあええわ。……そんなに言うんやったら……友達になったる」

捻くれた上から目線の言い方だがその声には震えと潤いがあった。面を上げた時荒谷の表情は笑顔だった。

「よろしゅう！颯人はん！！」

やる必要などなかったが、颯人と荒谷は握手を交わした。放課後に颯人は皆を教室に集めた。颯人の隣にいる人物に皆は目を丸くした。

「皆に紹介したい人物がいる。荒谷葉磨謙三郎だ」

「みんなよろしゅう」

「兄さんどうゆうこと？」

「……あんなに嫌がっていたのに」

「まあいいじゃないか」

ちょっとした動揺を抑えたのは凌だった。こんな時凌がいるととても頼りになる。凌は優柔不断だが統率力がとても高いので、みんな

凌に付いていった。皆から頼りにされ、引っ張っていくリーダータイプ。それが湊凌という人物だった。

「メンバーが増えたんだ。これは喜ぶことだぞ？皆も颯人を見習うように」

「今回コイツは何もしてねーだろうがよー!!」

「そう、だよな」

魅菜が珍しく琉杜に反発することなく、逆に賛成していた。

「まあ、メンバーが少しでも集まったんだからな。文句なしだ。さて、明日からの活動はメンバー集めだけでなく、他の活動もやろうと思う」

「すみません。ワイ、明日は無理や」

「・・・どうして？」

「写真部の活動日なんや。せやから勧誘は厳しいと思うわ」

「なら写真部のやつでも勧誘したらいい」

「いや、写真部はワイ一人や」

「なに!？」

そのことを聞いて過剰に反応する。そして次に出る行動を悟った。

「よし。イノセントチルドレン全員入部だ!!!」

(((((やっぱり))))))

颯人は溜息をつき、外を見る。

雨雲どころか雲一つない晴天の空。外で活動をしている部活動にと
って過ごしやすい気候だ。心地良い春風が木々を揺らし、葉の歌が
心を癒す。鳥たちも声を合わせて囀る。殺風景ではあるが、それが
またよい。殺風景はつまらないが純粹に見たいものが見える。時間
を忘れそうな麗らか日常。今は無関心だったあのころはもう忘れて
みよう。そんな前向きな気持ちの底から沸いてきた。だが、そ
の前に言わないと分からないであろう阿呆と天才の入り交じった秀
才を治していこう。

「いいか凌。部活に入るときは時間に縛られることになる。それで
お前の計画も丸潰れになる可能性が高い。それを承知の上で行って
いるのか？」

「問題ない。写真部は週一の活動だ。それに写真部は色々と利点が
聞く」

「利点？写真とるだけだから何もないんじゃないの？」

「いや、写真部は唯一の行動無制限の活動が出来る部なんだ」

燕学園には生徒立ち入り禁止の部屋や場所がある。そこに立ち入り
許可となっているのは生徒会と写真部なのだ。だからと言って写真
部に入る生徒は少ない。制限があることはなにかがあるに違いない。
そう思う生徒が多いからだ。だから葉磨謙三郎のような生徒は珍し
がられる。

「さらにそれを利用して報道部は写真部に写真を依頼することも少なくない。写真部は写真を撮りそれを報道部に渡し、料金として報道部しか知らない情報を獲ることが出来る。唯それを知っている生徒が極めて少ないために写真部はただ写真をとる部活と勘違いされるケースが多い。写真部の真相を知っているのは生徒会と四天王と一部の二年だろうな。」

「ただ入った部活がそないな危ない部活とは思ってもせえへんかったわ」

目を丸くする葉磨謙三郎。

しかし無駄に長い名前である。作者である自分でさえ何故こんな長い名前なのかと首を捻りたくなる。今更後悔。それは置いといて話を戻そう。

弘太は葉磨謙三郎の肩に手を置いた。

「普通は皆思わない。貴殿は正しい」

「あれ？結局なんなんだ？」

琉杜は首を捻っていた。異常なほどに琉杜の理解能力は低かった。そこで颯人は琉杜に助言した。

「お前はお得意の型でもしている」

「いや、そういう訳にもいかねえだろ？」

「琉杜が真面目なこと言ってる」

「まさかのまさか、だな」

「・・・入部ってどうするの？」

全てを無視して紅葉が葉磨謙三郎に話しかけていた。紅葉が積極的になるのも珍しかった。紅葉は皆の意見を否定せずに皆の後につんだって行き過ぎると判断した時には止める。だから積極的な紅葉は新鮮さがあつた。

「先生に言つて入部届けを貰つてそれを記入して出せばええ」

そういうことなので早速職員室に向かう。

担任に話しをつけ、入部届けを貰う。担任はそれに驚いていたが、笑つて了承してくれた。入部届けは簡単なものだった。記入するのは学年、クラス、名前、入部理由だった。皆はまともな理由を苦悩しながら書いていたが颯人は一言だった。

それは・・・『勧誘』だった。

ちなみに魅菜はまともな理由を考えると颯人の土手っ腹に拳を入れようとしていたが、それになれた颯人はすぐさま琉杜を盾にした。琉杜の鳩尾みぞおち近くを打つたので蹲うつすくまる。琉杜は颯人に対して叫ぶが何処からか用意した耳栓を使つていた。それを見ていた凌は弘太の入部届けに落書きしていた。物凄く上手いのだが落書きは落書き。激怒して凌を追い回す弘太。苦笑いしながら見守る紅葉。そして初めて人見知りしないで話をしている魅菜と葉磨謙三郎。

何故か。それは誰にも分からない。颯人たちと何か似ているのかも知れない。だがそんなのはどうでもいい。あの魅菜がここまで自分たちと同じくらい接する人物が出来たならそれは喜ぶところだろう。そうやってほんの一時の楽しい時間は過ぎ去り、また楽しい時間にくることを楽しみにする。それが人生なのかもしれない。自分はまだ人生の1/5ぐらいしか生きていない。だからここは「かも」と

しておこう。

無事に写真部の入部を認められ明日に活動開始となる訳だが、その前に部長を決めなくてはならない。だがそれはすぐに決まった。何故ならば燕学園には部活動をするものとして決まった規則がある。それは“部長はその部の最上級生でかつ責任感、統率力の優れた者を任命するべし”だ。その規則は学生書に書いてあるので知らないとは言えない。そうなること必然に最上級生の凌となる。部長が決まり、凌が騒ぎだしたところでチャイムがなる。騒いでいる凌をほったらかしにして颯人は皆を引き連れて寮に戻る。こうなると颯人の方が部長にむいていることは言うまでもない。

寮に戻り颯人は宿題に手をつけている。何故かは知らないが颯人の後ろの卓袱台にも同じ教科書が2つある。

琉杜と弘太のものだ。宿題が出る度に二人は颯人の部屋に訪問し、宿題を3人でやる。颯人はいとも簡単に弘太はゆつくりだが着々と琉杜は数分で潰れ颯人に答えとやり方を聞きながら宿題をこなす。琉杜が潰れると先に答えを聞き、その後により方を聞く。勿論颯人がそれを許す訳もなく、自分でやれと一点張りに主張する。極めて難しくない限り颯人の終了する時間は短く、終わると卓袱台に座り2人に教えるのだ。颯人にとってそれは日課でもあり暇つぶし。だが、この2人と宿題をすることは楽しかった。

「颯人少しいいか？」

「なんだ？」

「ここがどうしても貴殿と答えが合わんのだ」

ノートの一角を指す。

「ここはこの答えの3を代入する。そうすると必然に面積が出る」

「なるほど」

「なあ颯人よお」

「なんだ？何がわからない？」

「全部」

「論外」

そうして行くうちに6時。寮にいる生徒が食堂に入っていく。廊下が騒がしくなる。

「俺たちも行くか」

歩いていく。他の生徒と共に。

3人は食堂の前に立つ。目の前に広がるのは人込み。その中を掻き分けて進み、急に視界がよくなる。その中央部には幾つかの席が空いたテーブル。そこにいたのは大和撫子な紅葉とサイドポニーにした魅菜と相変わらずニット帽をかぶっている葉磨謙三郎がいた。

「凌は？」

「・・・あっち」

紅葉が指す方向を向く。そこには食堂戦争に加わっている凌の姿があった。

「何があつたのだ？」

「ジャンケンや。ジャンケン」

「なんだよそれ」

「凌がね、ジャンケンで負けたやつが皆の夕食を取りに行こうって」

「それでまんまとやられたわけか」

「しまったぜ。俺たちももう少し早く来ればアイツに持って来させたのに」

ちよつと悔しがっている琉杜。実は颯人も少しそう思ったので提案した。

「俺たちもやるか」

「おう！」

「うむ」

「遅出しは負けだ。いくぞ！ジャン、ケン・・・」

「」「ポン！！」「」

負けたのは琉杜で彼もまた凌と共に食堂戦争の真っ只中にいた。そもそも颯人が負ける訳がない。なぜならば彼はジャンケンにおいては全戦全勝で無敗の王者と謳われていた。つまり颯人はわざと負

けることも可能なのだ。ただこんなことで負けるのは癪なので負けないのだ。

「兄さん少しでもいいから負けたら？」

「いつかな」

「「「・・・・・・」」」

少しばかり呆れる一同であった。

しばらくすると2人が帰ってきた。流石に全部持ってくるのは不可能なので何往復はしたのだが。だが本当の戦争はとってやることではなく、この食べる時間だ。なぜならメンバーが集まり、全員で摘めるおかずを食堂のおばちゃんが用意してくれたのだ。更にそこに葉磨謙三郎が入ってより一層に戦争と化していた。

「おい琉杜！それは拙者のだ！！！」

「んだと！テメエ！！！」

「ならオレが貰おう」

「なら私も」

「「横取りするな！！その兄妹！！！！」」

「よしよし。いい子だな。そんな二人にはレタス大盛りだ」

「「いるか！！凌！！」」

その光景を見て葉磨謙三郎は惚けていた。

「・・・どうしたの？」

「いや、食事がこないに楽しいなんて思いもせえへんかったから。・・・こないな気持ちにさせるなんてお宅らほんまに不思議やわ」

一同は箸を止め、笑い出した。

「俺たちで不思議なら世界は不思議だらけじゃないか」

不意に葉磨謙三郎の肩に何かが触れた。見るとそれは颯人の手だった。

「いいじゃないかそれで。なっ、葉」

「颯人、はん・・・せやな」

そうやって賑やかな夕食が終わった。そして、ここは颯人の部屋。一人部屋なので6人入ると狭い。なので、魅菜と紅葉はベットの上でベットに対して垂直で寝転がり、颯人たちと話している。

「なあ、一つ思ったことを言っていないか？」

「なんだ？」

静まり返る。

「イノセントチルドレンを作ったわけだが、女子の数が少ないような気がする。イノセントチルドレンには魅菜や紅葉がいるが、それ

だけでは2人が可哀想だと思わないか？」

「かもしへんな」

「私は大丈夫だよ。みんながいるし」

「・・・私も」

「いや、せっかく高校に来たのによく話せるのが俺たちだけではない。女子だけで話したい時もあるだろう？だから、な」

「兄さん・・・に、兄さんがそう言うなら」

「・・・うん」

「なんや？いきなり変わりよった」

「はは。分かりやすいな二人とも」

「凌。ちよつといい？」

「なんだ？」

魅菜と紅葉は凌を廊下に連れ出した。

「うぎあああああ！！」

凌の悲鳴が寮中に響いた。

「凌先輩いつもあないな感じなんか？」

「まあな。いつもは琉杜なんだがな」

「・・・はあ」

しばらくすると魅菜と紅葉が戻ってきた。凌の姿はない。

「凌は？」

「自分の部屋で寝て来るって」

笑顔で返された。おそらく2人は凌をボコボコにして何処かに棄てられたのだろうと颯人は確信した。

魅菜と紅葉はベットのの上に座りこんだとき廊下から足音が聞こえる。足音は颯人の部屋の前で止った。前に一度こんなこともあったなと思う颯人。扉が少しずつゆっくりと開いていく。扉の向こうには顔を腫れ上げた凌がいた。

「お主また随分とやられたな」

「・・・手加減なしだ・・・」

「よく。生きて来られたな。琉杜なら死んでたな」

「なんでだよ!!!」

「顔面、よわいから」

「顔はきたえられねえだろ!!!」

くどくどと愚痴をこぼす琉杜だが、颯人はお得意の耳栓で完璧シャットアウトしていた。仕方なくその愚痴をいつも酷い目に合わされている魅菜に言ってやろうとしたが、魅菜も同じ耳栓をしていた。見ると魅菜だけでなく琉杜以外、みんな同じものをしていた。

「ん？終わったか？」

「なんでみんな同じ耳栓してるんだよ！！」

「颯人からの支給品だ」

「颯人よお。お前酷くないか？」

「いや、そんなことはないさ。お前はお前でいてくれるだけでいい」

その一言で部屋は静寂に包まれる。そんな中凌の一本締めが部屋に轟いた。

「さっ、もう遅いし今日はお開きだ。明日から活動にはいらないといけないからな。今夜はゆっくり睡眠をとってくれ」

「おう・・・ってもう9時30じゃねえか！」

「それはいかん！急がねば！寮母に見つかると面倒なことになりかねぬ！！！！」

「急ごう！紅葉ちゃん！！」

「・・・うん」

弘太、琉杜、魅菜、紅葉の4人は駆けて部屋を出ていった。部屋に残っているのは3人。葉と凌はゆっくりしている。

外出禁止時間は10時でそれ以降寮内をうろつけば翌日寮内清掃の餌食になる。見つかつていけない対象として寮長と警備員。一番見つかつていけないのは寮母だ。見つければ即食堂やら風呂やらの掃除が待っている。しかも寮母は何処からでも現われるという神出鬼没な存在となっており、学生の間では隠密の女王として男女寮に君臨していると噂が絶たない。

「2人ともゆっくりしてていいのか？」

「ワイの部屋は2つ隣りや。すぐに着くからうろたえる必要なしや」

「いや、この時間はみな移動してるからすぐには着かんぞ？」

「まじかいな！そら急がないかん！！」

「凌は？」

「俺はこの上だ。心配ない」

そう言つて携帯らしきものを、取り出しボタンを押す。するとベランダの上部から縄梯子が降りて来た。

「ちょっとした細工さ」

そのままベランダから自分の部屋に戻って行った。

「んないな仕掛けありかいな！」

そのまま走り去って行った。廊下から葉の叫び声が聞こえる。

「おらぁ！ワレえ！！どきや！！」

溜息を吐きつつ開けっ放しの扉を閉めた。外は月光が辺りを照らしていた。

「予習、するか」

結局颯人が寝たのは就寝時間ギリギリの11時だった

第参回廊 変心曲

カーテンから漏れる朝日は部屋中を明るく照らし眠気を吹き飛ばす糧となる。颯人もまたそれを糧とし、目覚める。

現在の時刻は朝食時間を過ぎていた。所謂寝坊いわゆるというものである。まだ少し眠い。瞼は半分しか開いていない。手を顔に押し当てる。

「・・・・・・・・しまった。寝過ごした・・・・・・・・」

朝食の時間は過ぎているので自分で作ることにした。燕学園寮の間取りは広く、キッチンとシャワー室が付いているもので、そこいらの下宿より部屋の設備は良い。簡易冷蔵庫の中身を確認する。そうして決まったのが、スクランブルエッグ。とりあえず胃袋に詰めておく。そうして学園へと足を運ぶ。

教室に入るとイノセントチルドレンの面々は不在で、第二体育館で暴れていると虫の報せが届いた。第二体育館は教室から少し離れたところにあるので行く気にはなれず、適当に近くを歩くことにした。廊下を歩いていると頭だけ出してプリントの束がこっちに向かつて歩いてくる。プリントを持ってフラフラと歩いているのは魅菜の隣の席にいる波風皐だった。皐はゆっくりと颯人の横を通り過ぎる。とても危な気だ。手伝おうと話かけた。

「大丈夫か？」

「あつ布石くん・・・・・・・・あととと」

「おっと」

話しかけたのがいけなかったのか皐はバランスを崩し、プリントの

束を落しそうになる。そこをすかさず颯人が受け止めた。見ただけではわからないが、皐は結構小柄だった。

（結構小さいな）

「そのプリントどうしたんだ？」

「先生に頼まれちゃって……」

「そうか。……なら半分くれ。手伝うよ」

「いいよ」。私が頼まれたことだし。それに布石君も忙しいだろうから」

「いや、暇だよ。それに危なくてみてらんねえから」

「あつ、うん。なら、よろしく」

皐からプリントを半分取る。どうやら1限目に使うものらしかった。教室までの道のりを色々話していた。イノセントチルドレンのこと。自分たちのこと。魅菜のこと。どうやら彼女には5つ上のお姉さんがいるらしく、教育実習生としてこの学園に勤めているらしかった。だからこの学園に来たのだという。

いつの間にか2人は教室の前にいた。皐は顔を上げる。

「ここでいいよ」

「そう、か」

プリントの半分を返す。また頭一個分しかでない状態になった。

「ありがとう」

颯人は最後に扉を開けた。皐は笑顔で返し、教室に入って行った。颯人はポケットに手をつ込み、後ろの扉から入って行った。自分の席に着く。いつの間にか教室にいた弘太たちに話しかける。

「遅かったな。いかなした？」

「寝坊だよ。寝坊」

「兄さんが寝坊だなんて珍しいね」

「自分でもビックリしたよ」

「・・・朝ご飯、どうしたの？」

「自分で作ったんだよ」

「「何い！」」

弘太と琉杜の目が光る。

「俺にも」

「拙者にも」

「「食わせる！！」」

「また今度な」

2人を流す。鞆から1限目の教科書とノートを取り出す。そんな中、一人の少女が歩いて来る。さっき廊下でプリントを一緒に運んでいた波風皇だ。

「布石君。さっきはありがと。助かったよ」

「いや、構わないよ。手伝って欲しかったらまた言ってくれ」

「うん。そうする」

「お前何かしたのかよ」

「プリントを運ぶのを手伝っただけだよ」

「へ」

これを切っ掛けに弘太や琉柱は皇と話し始めた。紅葉は入学当初から話し始めたので、抵抗はなかった。唯一魅菜だけは颯人の後ろに隠れている。

「あらゝまだ駄目か」

「すまない」

「ううん。全然大丈夫だから」

そんな陰湿の中一人の少女が颯人の教室に飛び込んでくるように突入してきた。それはまさに恐い物知らずの戦車のように。

その少女は肩に掛かるくらいのツインテールで前髪をセンター分け

している過剰な程に元気な子だった。少女はそのまま皐の元に走ってきた。急いで来せいか膝に手を置いて、息が荒れている。皐は心配そうに少女に手を伸ばしたが、少女は勢いよく皐の両肩を掴んだ。

「皐っち!!!!」

「ひゃああああああい!!ど、ど、ど、どうしたの!? 憂麗渚ちゃん」

「辞書、貸して」

「え?」

あまりにも勢いより単純な物だったので、皐は目を丸くした。憂麗渚なる少女は繰り返す。

「英和辞書、貸して」

「あつ、うん」

皐は自分の机に戻り、辞書を探す。戻ってきたが、その手には何も持っていない。

「ごめん。今日英語ないから忘れてきた」

「そっか。なら仕方ないね。困ったな」

「電子でいいのか?」

颯人が珍しく話しかけていた。

「えっ？う、うん」

「何で持っておるのだ？」

「電子辞書はいつも机中に置いてある」

琉杜は頷くのだが、他の者は目を丸くしていた。

「兄さん、勉強、どうしてるの？」

「寮の部屋に英和・和英辞書があるからな。何ページに何があるのかくらいわかる」

「記憶、してるんだ」

驚愕を隠せないまま憂麗渚は自分の教室にかけて行った。それを見ながら皐はボソリと言った。

「早い」

「和英辞典の186P15行目」

「はうわぁ！」

颯人は自分の持っている辞書で『早い』とゆう単語があるページを返答していた。

3時限目が終わった時だった。チャイムがなったと同時に憂麗渚が走って入ってきた。走っていったもとは颯人だった。手には何かを

持っている。

「布石君ありがと」

素っ気無い言い方だが渡された電子辞書には紙が挟まっていた。そこには『貸してくれてありがと 何かあったときまたよろしくね』それを見た時颯人の口元は緩んでいた。

「に、兄さんが笑ってる・・・」

「なんだ？ラブレターか？」

「そんな大層なものじゃないさ」

そうしてその手紙をポケットの中にしまった。

退屈だった授業も終わり、イノセントチルドレンは写真部の部室にいた。部室は意外にもしつかりとした設備で部屋の隅にはネガから焼ける部屋まで存在していた。ホワイトボードには『新・写真部発足会』とデカデカと書かれていた。ついでに『イノセントチルドレン集会』とも書いてあった。そのホワイトボードの前に凌が立って司会進行していた。

「えー、部活の内容を発表したいと思う」

「色々ととんでるな」

「今更だよな」

「静かに。写真部だから写真を撮らなければならない。従って部員

にはこの学園の謎を撮ってもらう」

「なんでや？普通は風景とか撮るんとちゃうんか？」

「イノセントチルドレンはアレだ」

「どれや？」

「………颯人パス」

「却下。弘太頼む」

「仕方あるまい。元々拙者たちは3年の謎を解き明かすために作られた」

「3年の謎？なんやそれ」

「この学園って3年生少ないでしょ？その謎を解明しようって凌が言ったの」

これまた珍しく魅菜が説明していた。もう誰一人として驚くことはない。魅菜の変化に皆気付き始めたからだ。

「そう言えばおらへんの。生徒会と役員しか見たことないわ」

「うむ。そのための一番の近道が学園の謎を撮るということである」

一同が思ったことは今回颯人出番なかったな、であった。

一人一人にカメラが支給された。カメラを持ち、学園内を歩き回る。颯人が一番最初に撮ろうと思ったのは桜だった。決して枯れることなく咲き続ける桜。この世ではありえないはずなのに誰とて気にも止めず、新聞社や記者でさえ聞きに来ることはない。この桜が謎と言わずどれを謎と言うのか。桜をカメラに収め、丘を後にする。颯人は気付きはしなかったが、透明だがハッキリ見えた。羽衣を纏った女性が桜の木に居座っていた。

桜を撮り終わると散歩していた。正直、桜以外に謎はなかった。だから散歩しながら探すことにした。ただなんとなく櫛通りを歩いていると一本だけ妙に大きい。その木を写真に収め、立ち去ろうとした時だった。

「お前、なにやってる？」

頭上から声が聞こえた。見るとさっきの大きな木の枝に2人居座っていた。いたのは爽やかスタイルの向井とツンツン頭の草薙だった。

「写真、撮ってるんです。先輩たちこそそのような場所で何してるんですか？」

「ここは俺たちの特等席だからな」

「ふーん」

そのままシャッターをきる。

「何してんの？」

「凌に謎をカメラに撮れって言われてますから貴方たちを撮らせて

もらっただけです」

「俺たちの何が謎なんだ？」

「そんな場所に居座っているから」

櫛通りをまた歩き出す。振り返ることなく。まるで興味を無くし次の玩具に走る子供のように。その後は謎という謎もなく、凌から帰還命令が下った。

部室に集まるメンバー。凌にカメラを渡し、データ写真を現像する。撮った写真は撮影した本人の前に置かれた。

「結果を報告する……非常に残念だ」

「どうしてだよ！」

「一通りみたが、謎らしい謎はなかった。あつて颯人の桜の木ぐら이다。魅菜と紅葉は風景しか撮ってない。弘太はゼロ。葉は屋上だ」

「ならそう言う貴殿はどうなんだ？」

「俺か？俺はな……」

懐から写真を取り出す。そこにはこの学園の3年と教師、そして学園が写っていた。確かに一番の謎かも知れない。たった数人の3年生。そして大勢いた3年生の残りの行方を知らない教師たち。今考えればそうだと確信する。だが、何故写真を撮っているとき気付かなかったのか。そもそも3年が謎と言っているのに何故3年を撮ろうとしなかったのか。

「まあいい。一番分けわからんのは琉杜、お前だ!!」

「何故だ!」

「お前はなぜなんでもない普通の人間を撮っている!!」

「俺からしたら武道をやってないやつは皆謎だ!」

「お前主体で考えるな!常識的に考える!!!」

2匹の犬が吠えていた。その脇で颯人は桜と3年の写真を見つめていた。写真を見ていると何か不快になる。常識的に何がおかしかった。あつていけないものがそこにはあった。だが、それが分からない。もやもやとしたものが胸に残留したまま部室を離れ寮にむかう。相変わらず宿題に勤む颯人だが、彼の背後は違った。背後では弘太、琉杜が苦戦しつつも宿題を終了させようとしていた。琉杜と弘太の間に葉もいるのだが、葉は部屋にくるまでに終わらせていたらしい。葉は葉で頭がよかった。特に英語に関しては学年1位をとる秀才だった。そうなると颯人の苦勞は減っていた。

「葉、ここはどうするのだ?」

「ここはcanなのうてableを使うんや。ここでbe動詞使ってはるやろ?」

「ふむ。そうか」

そのうちに颯人も宿題を終わらせ、3人の元に寄る。珍しく琉杜が

質問せずシャープペンを走らせていた。威勢よくシャープペンを置き、ノートを掲げた。

「出来た！」

「どれ見せてみる」

ノートを取り上げ目で一通り通し、頭の中で採点しだす。これが神童クラスと言われる大本だ。颯人は紙に書かなくても頭の中で構成してしまう。そして無駄に豊富な知識でその構成を完成させてしまうのだ。神童とはまた違う。だから”クラス”なのだ。

「どうだ？俺の回答はよ」

「100点中36点」

「琉杜にしては頑張ったな」

「・・・これか」

琉杜の点数に葉は呆れていた。そんな中凌が分厚い辞典とレポート用紙を持って入ってきた。琉杜はそれを見ただけで頭痛がしたらしく、頭を押さえていた。

「どないしたんですかそれ」

「おいおい。敬語はよしてくれ。聞くだけで背筋が寒くなる」

「そのとおりだ。お前と知り合ってまだ日は浅いが、昔から知っているように接してやってくれ」

「……はいな。で、どないしたんやそれ」

分厚い辞典を指差す葉。凌は辞典を机の上においた。辞典の表紙には『過去の偉人名言集』と書かれていた。

「この中から名言を探し、ノートに書かなくてはいかん。だが俺だけではつまらんからな。お前たちにもやって貰おうと思いここにきた」

「なんでだよ！」

「お前らなら特に琉杜なら面白い解答になるだろうと思ってな」

そういうことならと言うことで琉杜は魅菜と紅葉を呼び出した。5分ぐらいで2人はきた。男女寮は1階の学校に通ずる渡り廊下と もう一つ2階の渡り廊下で繋がっている。2階の渡り廊下は吹き抜けではないのでかなり暖かい。夏になれば窓を開けると涼しい風が入ってくる。とても過ごしやすい環境だ。更に、上位部の部屋を持つ学生に撮って一々一階まで行かなくていいと評判がよかった。

「事情は聞いたけどさ、なんで自分でやらないの？」

「まあいいじゃないか」

凌はシャープペンシルと消しゴムを取り出し、記録する体勢に入る。

「そうだなまずは……」

すらすらとペンを走らせる。しかも名言の後ろには誰が言ったもの

かを書いていた。それだけ凌も頭がいいと言うことだ。

「・・・地球は青かった」

「それは名言か？」

右眉を上げ、ちょっとだけ困る弘太だったが、凌はそれでも良いみたいだった。

「by毛利衛つと、他は？」

皆は何かないものかと考えていた。ちなみに辞典を使っているのは琉杜だけだった。少しだけ静まり返っている所に魅菜が発言した。

「天は人の上に人を作らず。また人の下に人を作らず」

魅菜の意外な解答に皆黙り、目を丸くしていた。

「いい言葉、だよな」

「そう、だな」

「「「「「?????」「」「」」

いい言葉であることと正しいのだが、魅菜と颯人が暗くなる意味が弘太たちには理解出来なかった。只唯一凌だけは目を細め、何かを見通すかのように二人を見ていた。だが、すぐにペンを走らせる。ノートには「天は人の上に人を作らず。また人の下に人を作らず。by福澤諭吉」と書かれ、隅の见えない方に「決別」、「何か」と書いていた。

「他は？」

今まで辞典を眺めていた琉杜は辞書を威勢よく閉じた。

「俺はこれだ！！」

「どれだ？」

「ダニエル。お前もか！！」

皆の視線が一気に氷点下に下がる。だが琉杜には効かないようで平気な顔をしていた。そこで颯人が止どめを刺した。

「琉杜。それは、ブルータスだ」

「へ？そうなの？」

「さっきまで見ていたのに間違えるとは脅威的な頭だな」

何故か分からないが葉が腕を組み、悩んでいた。それに気がつく紅葉。

「・・・どうしたの？」

「いやな。琉杜はんが物凄いボケやったやろ？せやからワイもボケなあかんと関西の血がうずいとるんや」

「・・・アレはボケじゃなくて本気・・・」

紅葉の声は聞こえないらしく、葉は考え続けていた。

そんな中颯人と弘太、魅菜の3人は交互に案を出し続けるので凌はゲームを考案した。それは名言を言えなくなったら負け、と言うものである。そのゲームに3人は賛成した。魅菜は言えるものが無くなり、颯人の部屋にあるライトノベルを読んでいた。しかし、弘太と颯人は火がついたようで暴走列車の如く、名言を雨霰と言いつづけていた。よくそこまで出たなと思う程にも関わらず凌は烈火の如く書き続けていた。しかも名前付きで。それに終止符をうったのはさつきからずつと考え込んでいる葉だった。急に立ち上がると天に向かって拳を掲げた。

「我が輩の日記に無理はある!!!!」

大ボケであるのに、琉杜より反応は薄かった。

「日記つけてるのか？」

「しかもそれ言ったから」

「アレだけ考えてそれか」

颯人、魅菜、弘太から非難の声が降り注いだ。普段から琉杜のボケを聞いているメンバーにはたいしたことなかったようだ。膝を抱え、部屋の隅に蹲る葉。紅葉は葉の肩を叩いて励ましていた。

「他には？」

無視したように続けようとする凌。ちなみに琉杜はさつきからずつと訳の分からない単語が飛んでいた為にベットの上で死んでいた。

「颯人。お主の番だぞ？流石にもうなかるうて」

「いや、どうか？」

フフン、と鼻で笑う颯人。

「お前はまだ誰でも知っている名言を言っていない」

「なに！？」

「それはな・・・其の疾きこと風の如く、其の徐^{しず}かなること林の如く、侵掠すること火の如く、知りがたきこと陰の如く、動かざること山の如し、動くこと雷霆の如し、だ！！！」

「なっ！！」

驚き後ずさりする弘太。追い討ちをかけるように補足を付け足した。

「ちなみにこれはかの有名な武田信玄が言ったもしくは戦場で使ったとされているが、もとは中国の孫子が言ったとされている」

「せやな」

いつの間にか葉が復帰し、胡座をかいて座る。

「その意味は『行動するときには風のように素早く、待機するときには林のように物静かに、攻撃するときには火のように激しく、身を隠すときは陰のように息を潜ませ、動かず守るときは山のようにどっしりと、出現は雷のように突然に。闘いの戦法やな』」

「よく知ってるな」

「こないなもんやったら知つとる」

「ほ」

皆が関心している時に凌は名言で一杯になったノートに『其疾如風、其寂如林、侵掠如火、不動如山、難知如陰、動如雷霆』と書いていた。それでノートが満杯になった。ノートを閉じる。

「これで提出出来る。感謝する」

「待て！まだいける！！」

「諦める。お前の負けは覆せない。それに……」

満杯になったノートを開き、時計を指す。もう直夕食だった。

「ノートが一杯で書けん上に夕食だ」

「うおおおおお！！！！嘘だああ！！！！」

衝撃のあまり弘太は転げ回っていた。それを誰も止めることもなく、食堂に向かった。

食堂に着くいつもの席が空いていた。どうやらイノセントチルドレンの指定席化しているようだ。空いていないから何かをされる訳でもないのだが学生の間では禁止となっているらしい。そのうちのテーブルに『イノセントチルドレン御一行様』と貼られるのではないのかと思う颯人だった。今日の夕食は鍋だった。しかもイノセントチルドレン限定で。そうしておばちゃんが一々自分たちを作

るのが面倒になってきていると確信した。

騒々しい夕食を終え、また性懲りもなく颯人の部屋に集まる面々。
急に中央のテーブルを叩く凌。

「皆！聞いてくれ！！」

「ん？」

「何？」

「なんだよ」

「またか」

「・・・ハア」

「なんや」

「・・・途中おかしいのがあったが・・・まあ、いい。それより
メンバー集めをしたいと思う」

「『『『』』』』一人でやってれば？』『』『』」

5人のハーモニーが凌をあしらう。少し泣きそうになる凌だが、そこは堪えることにした。

「お前ら酷くね？」

「別に」

そう言って中央のテーブルに集まる。

「で？集めるって言ってもどうやって集めるつもりだ？」

「簡単さ。魅菜と紅葉による女子寮勧誘さ」

「穴だらけちゃうか？」

「やってみないとわからないさ」

嫌そうな顔をする魅菜だったが、紅葉と凌と颯人が進めるので、断れなかったらしい。颯人は魅菜の人見知りをなんとかして治したいので凌の提案に反対はしなかった。魅菜が颯人たちと話している間、凌は紅葉に何かを渡していた。女子寮に向かう2人。部屋から出ていったことを確認し、凌に聞いた。

「紅葉に何を渡したんだ？」

「これさ」

「トランシーバ？」

凌がポケットから取り出したのは黒いトランシーバだった。どうやらこのトランシーバは受信用らしく、紅葉に渡した送信用の改良携帯と繋がっているとのこと。渡された紅葉は困惑していたが、凌の優しい説明で納得したらしい。但し、紅葉が渡された送信用携帯電話は音声しか拾えず、聞くことが出来ない。そこでもう一つ通信用のトランシーバも渡したらしい。

「こちらから紅葉にミッションを通達する。紅葉にはイヤホン付き受信用携帯と送信用トランシーバを渡してある。こちらからの声は送れるが向こうからは送ることが出来ない仕掛けにしてある」

「相変わらずやること訳わかんねえな」

「まあいいさ」

そう言いながらトランシーバのボタンを押す。

「聞こえるか？オバー」

『・・・聞こえる。オバ』

「ちょっとまで。何故紅葉がこっちに声を送信出来る？」

「マイク付きイヤホンさ」

さらつと流す凌。

この男に違法も関係ないのではと考えてしまう颯人。

一体幾つこのような発明をしてきただろう。デジカメを小型カメラのように改造し、滑車を罫に使う為に改良し、流木ですら活用してしまう。颯人が絶対敵わないと思う瞬間だった。

「誰がいる？」

『・・・2年生。電話してる』

「2年か・・・話せるか？」

『・・・難しい』

少し暗めの憂鬱な紅葉の音が聞こえる。上級生には流石に話しくいらしい。

「分かった。流せ」

『・・・了解』

そんなふうに勧誘仕切れずに探索していると、元気な声が二人を止めた。

『魅菜ちゃん！！！！紅葉ちゃん！！！！』

「この声は三波さんか？」

『・・・臯ちゃん』

『あっ・・・うっ・・・うっうっ』

どうやら魅菜はまた例の悪い状態に陥っているようだった。

『・・・お風呂？』

『うん！！ね！！一緒に入ろ！！！！』

『え・・・』

『・・・どうする？オバ』

そんな質問をしてくる。男陣はお互いの視線を合わせ、頷く。代表として颯人が言うことになった。

「断つたら悪いから行ってこい。オーバー」

「・・・分かった。オバ」

「・・・行く」

「えっ！？ちょ！く、紅葉ちゃん！！！！！」

「よし！！いこ！！！！！」

「えっ・・・あわわわー！！！」

ズルズルと引張られる魅菜の姿が容易に想像出来た。魅菜は負けん気と勢いはよいのだが、一度飲み込まれると一気に崩れてしまう。それが欠点だった。

脱衣所に入ったようで健全な思春期の男子には毒な会話がトランシーバから聞こえてくる。

「わーいいな、魅菜ちゃんの胸おつきいー！！！」

「えっ！？ちょ！？ちょつと！」

「・・・」

どうしても手が動かない男子たち。消さなければならぬのは分かっているが、消せない。何故入ると分かっていたのに電源を消さな

かったのか。それは皆がトランシーバそっちのけで大富豪をし始めたからだ。盛り上がるだけ盛り上がり、気付いた頃にはもう手遅れで、現状にいたる。

紅葉は紅葉で電源を切ることを忘れているらしくイヤホンを取っただけらしい。

『紅葉ちゃんもおつきい！いいな！！』

『・・・そんなことない』

動かぬ男子たちの中で衝動を押さえ、颯人が動き電源を切った。

「ハア、ハア、ハア、や、やったぞ。やってやった！！！」

歓喜のあまりガッツポーズをする颯人。颯人の喜びと自分たちの平和を称え、拍手する他のメンバー。そのうちそれにも飽きて自分たちも風呂に行くことにした。

各自部屋に戻り、風呂に行くことになった。

燕学園の共同風呂は大浴場と小浴場があり、中でも大浴場にはサウナ、ジャグジー完備なうえに晴れの日には露天風呂開放といたせりつくせりな豪華なものだった。普通なら3年生が占領してしまうケースが多いのだが、3年生不在のこの学園には関係ないものだった。更に珍しく1年生が何かを占領しても2年生は何も言わない。逆に1年生が何かを占領すると2年生も違うめのを占領するのだ。だから上下関係の争いも全くない平和な学園なのだ。

例の如く颯人は一番だった。続々とメンバーが入ってくる。だが葉だけは入ってこなかった。しかし、変わりに赤髪のロン毛が入ってきた。こんなのだかなと思いつつも上がる颯人だった。

大浴場から上がってきた颯人。凌たちも続々と颯人の部屋に入って

くる。

何故颯人の部屋なのかは分からない。言えるのは皆自然に集まってくる。只それだけ。最後に葉が入ってきた。空いたテーブルのスペースに胡座をかく。

「お前自分の部屋の風呂使ったのか？」

口をポカンと開ける葉。

「せないなわけあるか。いつもならともかく今日は皆と同じ大浴場や」

颯人たちは目線を合わせアイコンタクトをとる。5分間かかって得た答えは『知らない』だった。それもその筈だ。葉は学校でも寮でも何処にいてもマフラーを巻いてニット帽をかつぱりと被っていて誰も葉の素顔を知らないのだ。

「それだけ顔を隠していたらわからるうにも分からないだろ？」

「あつ……そやったな」

そう言つてマフラーとニット帽を外す。

「なっ！」

そこにはさつき大浴場でみた赤髪のロン毛の兄ちゃんがいた。

「あ——！！！！お前か！！」

急に立ち上がり、驚く颯人。ここまでの驚く颯人も珍しかった。

「あんなロン毛いたかと思っただがお前か！」

「せや。まあ、ニット帽被ってたからしゃあないか」

そんな騒々しい中疲れ果てた魅菜と平穏な紅葉が入ってきた。二人とも頬を紅くし、ちよつと色っぽい。

「大丈夫か？」

掌で颯人に座れのサインを送りつつ、凌が問う。

「大丈夫じゃない・・・疲れた」

「風呂に入って疲れてたのなら意味なかるうて」

「何をしたらそこまで疲れるんだ？」

「・・・遊ばれた」

紅葉が代弁した。

急に話しに入ってくるのは紅葉の得意分野だった。しかし、誰とて苛つくことはない。紅葉が出す雰囲気には皆が吞まれおとなしくなる。或る意味『魔法』とも言える芸当だった。だが、この世に『魔法』は存在しない。だが或る。そんな曖昧な位置に『魔法』はある。一体誰が初めて『魔法』とゆうものを造ったのだろうか。

奇跡を起こさせる術。それが魔法。だが近代に近付けば近付くほど『魔法』は価値のないものになってゆく。なぜなら『魔法』と言う“言葉”は奇跡でも何でもない場所に多々使われる。

それは『魔法』の意味を打ち消し、意味のないものになっているので

はないだろうか。

さて、話がそれたがここいらで話を戻そう。

「別から見るとなんかいやらしいな」

「兄さんがそんなこと言わないで！」

何故か分からないが怒られた。魅菜にとって颯人の存在は高く、神聖とまではいかないが、純粹であってほしいらしい。

「でも仲良くなったんだろ？ならよかったじゃねえか」

「・・・簡単にだった」

「魅菜の場合そこまで簡単にいかんだろ」

何かを感じ取っている凌の言い回し。颯人はいつもこの言い回しに疑問を持っていた。全てを見透かしてでもいるようなそのような言い方。そして大概言っていることは正しく、その通りになってしまふ。神出ない限りわからないことも凌は分かっているのではないかといつも思ってしまうのだった。

「話せるようにはなつたんかいな？」

「うん。なんとか、ね」

「ならよかったじゃないか」

「うん・・・てか誰？」

初めて見る赤髪の人物を指差し、聞く。

「・・・誰？」

入ってきてからかなり時間がたっているのに気付くのが今とは驚愕するしかなかった。

「さっきまで話してたろうがよ！」

「うつさい！！」

容赦なく鳩尾を突く魅菜。琉杜は叫び声もなく倒れ、痙攣している。

「・・・哀れ」

「紅葉、お主少しは琉杜のこと労ってやったらどうだ？」

「・・・馬鹿に労る言葉はない」

この6人には遠慮の2文字は存在しない。逆に遠慮することは縁の切れ目といえるほどだ。それだけ強い信頼感と友情をメンバーは持っている。親友以上家族未満。メンバーに最適な言葉ではなからうか。

「ワイやワイ。荒谷葉磨謙三郎や」

「えっ！よ、葉くん！嘘」

「・・・信じられない」

「な、なんや?! 酷い言われようやないか!?!」

モーマンタイ
「問題無し」

とりあえず、とゆうことで人生ゲームを始めた6人。

颯人の部屋のロフトには遊び道具が山のようにある。

颯人は決してそのようなものは買わない。それなのに何故ロフトが一杯か。それは凌のせいだった。凌は暇になると新しい遊び道具を探し出し、颯人の部屋で実行し、置いて行くとゆうたちの悪いことをしてゆく。

まだ一週間も過ぎていやしないのにこの量となると寒気がする。1ヶ月もしたら廃品にだそうと考えている颯人。だが、凌が許すわけもない。その時はどうやって制するのもかも計画しなければならぬ。それだけ凌を出し抜くのは大変なのだ。

「6で上がりだ」

「なんでや!!! 3回中3回も琉杜はんが一位やなんておかしいやろ!!! いかさまか! イカサマなんやな!?!」

「違うよ。琉杜は馬鹿だけど運は強い。初めは分からなかった。だけど、人生ゲームで連勝するから凌がこんなあり得るか!?! つて、言うものだから占師さんの所に行ったの。琉杜を占ったらさ、占師さんがね、この子は稀に見る幸運な子です。業界上言いたくはありませんが、彼は精霊か女神に愛されし聖児かも知れません。つて」

長々とかつ淡々とした苛つくこともない話し方で琉杜の幸福を語る魅菜。

「ほ、なんや、けつたいやな。ほんであないに頭わるいんか？」

「いや、それはない」

さつきまで琉杜と戯れあっていた凌が真横にいた。その瞳は薄く哀しげだった。

「アイツの頭の悪さは別だ。多分ほかの何かを失っているはずだ」

魅菜、凌、葉は琉杜をみる。琉杜は颯人、弘太、紅葉と戯れている。その幼い顔から零れる笑顔は無垢そのもので、何かを失っているとは思信じられない。人より知識のない武道馬鹿で、ムードメーカー。それが大橋琉杜でそれ以外なんでもない。今は只それだけでいいと思う3人だった。

見回り時間が刻々と近付く。廊下でも生徒がいそいそと移動を始めるのが確認出来た頃、メンバーは自分たちの部屋に戻った。片付けをしている颯人。テーブルの上にある人生ゲームを見て呟く。

「何かを失った幸福、か」

あれだけ騒いでいたのに聞く所は聞くのである。乱雑に片付ける。そのままロフトの奥にしまう。あの人生ゲームはもう二度と開けられないことはないだろうと思う颯人。

照明を消す。上弦の月が辺りを怪しく照らす。夜になれば皆が皆不安に陥る。だからこそ光を求める。光と闇は対にあるからこそ意味がある。この世は全て表裏一体。表裏のない世界は破滅の世。もしくは地獄。逃げることでできない牢獄の箱庭。世界は上手く出来ている。

第四回廊 行進曲

只今4時15分。

清々しいどころかまだ周りはほんのり薄暗いビター的な感じですよ。
こんな明け方は憂鬱です。

「阿呆か！なにやってる！作者！？」

む？何をやっているとは失礼な。今の貴方の気分を文字にしてあげ
てるだけではありませんか。

「いらん！！大きなお世話だ！さつさと何処かいけ！！！」

アレ．．．あははは。

「何がアレだ。最後笑ってるじゃねえか」

寒くなったのでとりあえずここはどうでも良い所ですからすっ飛ば
しちゃいましょう。

「ま！待て！！誰のせいでこうなっと思ったてる！おま！」

現在時刻は6時半。

清々しい朝を迎えたというのに颯人は憂鬱だった。

それもそのはず。今日は日曜日。一昨日から今日一日はメンバー
集めに没頭すること宣言により実行しなければならないからだ。し
かもよりによって全員による勧誘なので逃げ切れない状態にあった。

「もー、そんな膨れっ面しないでよ兄さん」

「そりゃしたくもなるさ。大事な日曜日をこんなつまらないことで潰されたんだからな」

「つまらないとは何事か！これはとても大切なことでな勧誘することとで他の生徒との交流をふまえているのだぞ！！そもそも……」

「勝手に言ってるよ」

ポケットに右手を突っ込んで流す。凌とすれ違った時香水のいい匂いがした。

（フレグランス？……凌のやつ香水なんかつけてたか？）

疑問が浮かぶがそれが何かわからない。

この学園に来て頻繁に発生しているこの現象。手掛かりはあるが目的地にたどり着くことはない。ある一定の位置で靄がかかり、いつの間にか元に戻る。そんな曖昧な事がループしているのだ。

「でもよお、メンバーを集めねえと意味ねえんだろ？あんま乗り気にはなれねえけどよ」

「うむ、だが此も修業の内、又凌の言っていることも正しかろう」

「一々言わなくても知ってるさ」

振り向いた颯人の表情は華やかで繊細な百合のような笑顔だった。魅菜と紅葉はその笑顔に見とれていた。

琉杜と弘太は2人の顔の前で手を上下させている。どれだけ大きく腕を降つてもびくともしない。弘太は鼻を鳴らし腕を組み、目を細める。琉杜は魅菜の頬に指を当て、指を回す。

「止めて!!」

瞬時に琉杜の指を噛む。一瞬で目を白くする。

「痛って

!!!!!!何しやがる!!!!!!」

「グリグリするから!!」

二人のシャウトで紅葉がびくつく。

その後目を丸くし、辺りを見回す。原因が琉杜と魅菜と気がつく。溜息をついて、元に戻る。その状態を見ていた弘太は吹き出しそうになるがそこは堪えた。

「どうした？」

颯人は2人の顔に近付けた。

「な、何でもないです!兄さん!!」

「・・・う、うん」

首を傾け、目を細めた。

「そうか?なら、いいが」

「お前ら!!!!」

後ろで吠える犬が一人。

「無視するな！！さびしいだろうが！だいいち二人とも分かりやすい！！！」

「・・・何が？」

冷たく、見下すような紅葉の一言。その場だけ一気に氷点下と化した。少しだけ青ざめる凌。

「あれ？オレ、地雷踏んだ？」

「南無」

手を合わせる弘太。紅葉は凌を鷲掴みにし、少し離れた。

「うぎああああああ！！！！！」

「あわわわ」

「恐らく紅葉が最強だろうな」

「あ、ああ」

「へ？なんのこと？」

琉杜だけがこの場を理解していないようだった。

ゴミ屑になった凌を弘太が担ぎ、学園を歩き回る。グラウンドやフェンス向こうのテニス場には部活に勤む学生が輝きを放ち、声を張り

上げる。麗らかな春が気分を清らかにする。

中学にいた時はこんな気分になることはなかった。凌が卒業してつまらない日常が来て、凌以外のメンバーと一緒にいる時しか楽しめなかったあの頃の自分はもういない。そう思う今日この頃。今俺たちはメンバーを探している。

「なあ、皆で探すより個人で探したほうがよくないか？」

「せやな。氣いつとったんやけど言う機会逃しとったわ」

「とゆうことで各自で探すこと・・・解散！」

颯人の一本締めでちりじりに別れるメンバー。

ゴミと化していた凌は空中に投げられ見事な人工4回転を披露しつつ、茂みの中に消えた。

校舎内を探す颯人だったが、今更になって気がつく。

「休日の日^に学校にいるやつなんて暇人か部活やってるやつしかないんじゃないか？」

つまり部活動のない颯人たちは暇人となってしまう。

その事を自覚した途端に少し鬱結になる。しかし、こんな些細なことで落ち込むわけにも行かないので、とりあえず教室に行くことにした。

教室の前に着き扉を開く。

「なんと・・・」

そこにはいそいそとペンを走らせる波風皐がいた。たった一人で作

業をしている彼女はどこはたとなくさびしく見えた。

「波風さん、なにしてるのですか？」

「え？・・・あわわわわ！！！！布石くん！わきゃああ」

皐は豪快に椅子と共に倒れた。

「おっと」

頭を打つ前に手首を掴み、引き上げた。小柄な皐は簡単に颯人の胸に収まった。以前にもこんなことあったなと思いつつ皐を放す。

「ふあゝ、びつくりした」

「すまない」

「別に謝ることじゃないから。ところで学校で何してるの？」

「メンバー探したよ。凌に付き合わされてな」

「凌？・・・どなた？」

この学園にいて自分たちと一緒にいる湊凌を知らない人物がいることに驚いた。この人はある意味すごいと思うてしまう。

「2年生の湊凌先輩だよ。俺たちといつも一緒にいるだろ？」

「あ、ああ、うん分かった」

「ところでなにをしてるんだ？」

「学級委員の仕事してるの。掲示物の張り替えと学級日誌更新ね」

「いつもこんなことしてるのか？すごいな……」

「別にすごいよ？当たり前のことしてるだけだから」

「そんなことないさ。人は時として当たり前のことですえ怠る。当たり前を当然として行なうことは凄いのと思う」

「ふん。そんなものなんだ」

シャープペンシルを風車のように華麗に回していた。

「手伝うよ」

「えっ、別に……！！」

マナーモードにしてある携帯が震える。

皐は携帯を開き、目を通す。いつもオドオドとして何でもゆっくりと行なう皐だが、携帯のボタンを押すスピードは普段では考えられないような早さだった。携帯を両手に挟みつつ、重ねた手を頭の上に持っていった。

「ごめんなさい！！大切な用事入って行かなきゃ駄目なの！！……それで……」

上目遣いで会話される。つまり、後の仕事をお願いします。それを察した颯人。

「いいよ」

その一言で満開の向日葵が咲く。

皐自身から訳のわからない光線が発せられ、それが後光のように見えた。思わず手を合わせたくなるが、そこは我慢。

「じゃ、お願い！終わったら私の机の中に入れといていいから！」

大急ぎで教室を出ていく皐。

仕事に入ろうとしたとき、皐の悲鳴が聞こえたが、放っておくことにした。

掲示物を貼り終わり、時計を見るともうすぐで12時になるうとしていた。

「もう、こんな時間か」

教室を出ようとするが、何かが気になり、振り返る。

勿論そこには何も無い。

首を傾げ、教室に出る。

扉を閉めたとき、颯人の机にこの学園の制服でないセーラー服を着た少女が外を見ながら、座っていた。寮に戻る途中に葉と出くわす。

「よう。どうだ？」

「ぼちぼちでんな、と言いたところやけどサッパリや」

「くす、そうか。オレもだ」

二人は肩を並べて歩く。太陽が身体を温める。それがまた心地良い。

「颯人はんには、礼、言わないかな」

「何故だ？」

「……颯人はんに、いや、イノセントチルドレンに入らなワイの高校生活は退屈なものやったと思うわ」

「それならオレに礼を言わず、皆に礼を言ったらいい。オレはただお前が入ることに了承しただけだ」

「それでもや。イノセントチルドレンは颯人はんを中心として集まってる感じがするねん。颯人はんが了承してくれたのはデカいと思うわ」

「……それはどうゆうことだ？」

足を止める。葉は止まらずに牛歩になる。

「……そのうちわかるやろ」

葉が初めて見せたこの行動。

凌と同じ何か大事なことを隠してでもいるような、そんな違和感が背筋を這いずる。

だが、その違和感が分かるまで颯人は動かない。いや、動けないのだ。

「はよ行こうや。皆待っとるわ」

「あ、ああ」

歩いて行く。

いつの間にか春風が止み、花の香りもしなくなっていた。

寮食堂に着くと落ち着きのない人物が座っていた。

「よ、どうした？」

「あつ……葉さん。ついでに兄さん」

「おっす」

「待て。オレから話しかけたのについてか？」

席に座る。

どうやらほかのメンバーが来るまで待っているらしい。

紅葉はさっきまでいたが、御手洗に行ったらしい。弘太と琉杜は争い中で、凌は何故かテニス部とテニスの試合をしているらしい。

こんな風になるだと予測はしていた。そんなことはどうでもいいのだが。

「兄さんどうだった？」

「葉含めサツパリだな」

「そう」

魅菜・紅葉組も駄目らしい。

無論あの3人が引つ掛かるわけもなく収穫は0だ。

弘太・琉杜は傷が絶えなくらいボロボロに凌に至っては涼しい顔をしていた。そんな食事時に凌から新たな提案が発表された。

「皆聞いてくれ」

箸を止める者はいない。

「昼からはメンバー集めを止めて違うことをしようと思う」

皆の箸が止る。

「何故だ！？何故そこだけ興味を示す！！」

「・・・メンバー集め」

「「「「「つまんないから」「」「」「」

「軽くショック・・・いや・・・第一次石油ショックばりにショックだ！！これを第一次カルショックと呼び、新たな日本史に加えよう」

誇らしげに日本史を更新し、日本を馬鹿にしている日本人が一人。

「え？なんだ？新たな日本史を作っているのか？なら全ての人物をオレにしよう」

「それは紛れもない改竄だ。第一日本史はそう簡単に書き替えられるわけないだろうが」

「え？そなの？てか、かいざんってなんだ！アレか！？何処かの山

か？」

「ここまで阿呆か・・・主、やるな」

「かいざんは新たな鼠だ」

「ふうゝありがとよ。これでまた賢くなっただぜ」

この展開は大分予測出来た。

発案しようとしていた凌は御丁寧に靴を脱ぎ、椅子のうえでの字を指で描きながら拗ねていた。

「で？午後からは何をするのだ？」

その言葉が聞こえた時の凌の顔は輝きを取り戻した。その姿は新しい玩具を見つけた子供のようだった。

「よくぞ聞いてくれた。午後からは運動をしてもらおう」

凌の意外な発表に皆が注目し、琉杜が目を輝かせた。こうなれば凌の独壇場になる。

「いきなりどないしたんや？」

「俺たちが参加するアレは学力と体力が必要になってくる。学力は何時でも出来る。夜にでもすればいい。だが、体力は日が出ているときしか出来ない。それでオレが考えたプランがこれだ」

テーブルに数枚の紙が置かれる。紙には運動の種目と補足が書かれていた。その種目と補足はこうだ。

- 1 野球 脚力・腕力向上、早く動く物に反応出来るようにする。
- 2 サッカー 瞬発力・判断力向上、長い時間細かく動きにする
- 3 バスケットボール 跳躍力向上、狭い場所で動けるようにする
- 4 水泳 肺活量向上、水でも動けるようにする
- 1 2 3 共通 体力向上、制球力を付ける。
- 5 弓道 集中力向上

「これはほんの一部だ。他にも……」

「あーいい。ここまでくればもう分かる」

数枚の紙を束ねる。束ねた紙を丸め凌に渡す。凌はすんなりと受け取った。しかし、その手は震えていた。余程悲しかったのだろう。

「やるなら2、3種目でいい。野球とドッチボールそれにいつものように何かをすればいい」

席を立つ。

「部屋に戻っている。お前のことだ。場所は取ってあるのだろうか？
後でメールをよこしてくれ」

颯人の背中は何でか寂しげだった。

「兄さん……」

「……颯人……」

そんな颯人を見ると魅菜と紅葉の表情も寂しくなる。
そして凌は睨みをきかせ、颯人を見送っていた。

部屋に戻った颯人はハード本と同じくらいのノートに何かを書いている。

その表情は無表情でそこからは何も読み取ることは出来ない。
どれだけ凄い器でも中身が無ければ無価値になるように今の颯人は無価値になっている。そうそれは逆でも同じ事。中身が無価値ならそれは中身だけが無価値になる。颯人はそんな臨界に現存しているいや、それは颯人だけにあらず人自体がそんな場所に生きているのだ。

ノートを書き終わった時に丁度扉をノックする音が聞こえた。

「どうぞ」

ある程度机を片付ける。

「失礼する」

凌の声だった。片付けながら話す。

「どうした？さっきも言ったとおり場所ならメールしてくればよかったのに。まあ座れよ」

凌は座らなかった。それどころか敵意の籠った気配を漂わせていた。人間の六感は敏感なもので自分の死やマイナスになるものには過剰に反応してしまう。それに例外はあまりなく、幾ら颯人としてそれには敏感だった。座ることになく立ったままだった。

しばらく睨みあっていたが、凌が瞼を閉じると敵意は瞬間蒸発したかのように消えていた。更にその場に座り出した。さっきまでは鬼

神のようなたたずまいが今は隙が空きまくりの常人に戻った。
そのギャップの激しさに颯人は拍子抜けしてしまう。

「いきなりどうしたんだよ」

「いやつまらんことだ」

「本当か？あんたがそんな形相でくるってことは何か重大なことがあると思っていたのは俺だけか？」

「さあな」

お茶を用意する。

颯人の部屋には一番最初のメンバーと最近追加された葉の湯飲みが置いてある。

これは颯人が用意したわけではなく、各自が勝手に持って来てわざと置いて帰るといふ悪徳商法的な手口をしてゆくのだ。主にテーブルの前でいつの間にか引き出してきた漫画を片手にお茶を飲んでる人物が。

「で？本当になにしに来たんだ？」

「・・・・・・はて、何しに来たんだっけな？」

「人の部屋に入った途端に敵意むき出しで睨めっこして、座ったと思ったら急に漫画読み出しているとゆうわけわからん行動をした上でその発言か？」

「はは。まあいいじゃねえか。練習場所はグラウンド。集合場所は写真部の部室だ」

「了解」

そうして凌は出て言った。半開きになった扉をマジマジと見る。

（何か言いたかったんだろうな）

そう思っではいた。だが、言わなかった。そのまま扉を開け、出て行く。

虚空の箱に鍵の閉まる音が木霊する。カーテンが閉められた暗室のような空間は誰かを迎え入れるには何かが足りなかった。

部室には全員来ていた。どうやら颯人が最後らしい。

「おせえじゃねえかよ！！待ちくたびれて筋トレするところだった
だろ！！！！」

いきなりむさ苦しい奴が絡んで来た。

「死ね」

目を丸くした後、指で、のの字を書く御決まりの拗ね方をしだす琉杜。

それをあやすのは紅葉だった。

「やっと役者が揃ったな。では、みなさんには野球をしてもらっ」

ホワイトボードを思いつき叩く凌。

「な、なに・・・アレ」

「どうせ映画かテレビか漫画の見過ぎでござろう」

「なるほど」

「野球をやるのに異論はないが、何をする気だ？6人なんて対したことできんぞ？」

「せや。出来るゆうたらノックやキャッチボールぐらいやる？やりようによれば他にも出来へんこともないやろうけど・・・」

「そうだな。だが・・・その何が悪い？」

その言葉に皆は納得した。

古来より言葉には力があつた。どのような境地に立たされようと言葉で覆す現実だつてある。その力を持っていると言われてるのが言霊。その霊的力は人を善き方向に導けば悪き方向にも誘う。言葉とは恐ろしいものなのだ。7人はバットとグローブ、ミットを持ち、グラウンドへ出る。
グラウンドでは野球部及びソフトボール部が声を張り上げ、練習に勤んでいる。

「光岡！！滓辺！！」

凌は野球部とソフトボール部の部長を集め、交渉している。

「ほんまに大丈夫なんか？」

「大丈夫だよ。凌だもん」

「そないなもんかねえ、って弘太はんと琉杜はんは何処？」

「・・・あそこ」

紅葉が指差す方向には琉杜が弘太を追いかけて回っていた。

「まて！ゴオラア！！」

「ははは。貴様の足で追いつけるかな？！」

「何故に追いかけて？」

「さあな。いつものことだ」

「いつも？」

「・・・あの2人馬鹿だから」

「・・・ふっ・・・」

「・・・クスッ・・・」

颯人たちは微笑む。それを見て首をかしげる。

「？」

その時、凌が大声を出し、呼ぶ。

「おーい！！！！いくぞー！！」

「うん!!」

「.....」

「おうっ!!!!」

葉を残し凌の元へ駆け出す3人。
それを立ち尽くしたまま見つめる。

「魅菜いくぞ!」

「うん!」

「「とおおおおりややや!!!!」」

「うおおおおお!!!!」

「どうらああああ!!!!」

遠くで颯人は弘太に、魅菜は琉杜にドロップキックをおみまいしていた。

「まあ、それぐらいにしとき。いくらその二人が頑丈やからゆうても限度、ちゅうもんがあるやろ」

後ろから葉がゆつくりと歩いてくる。

「.....そう.....だな.....なら.....お前が食らえ!!!!」

颯人のおはこ十八番超低空高速ドロップキックが葉の向う脛を狙う。
これを食らって死ななかった奴は一人とていない。なら避けた奴は
何人かと尋ねられたら・・・それですら誰もいない。しかし今奇
跡が起きた。葉は意図も簡単に避けたのだ。

「甘いわ。それぐらい御見通し・・・いい!!」

目は隠れて見えないがその声の裏返りかたから驚愕していることは
明白だった。

颯人は避けられたと確信した瞬間、その低さを利用し地面に手を着
き、その腕を軸にし、方向を変え、超低空遠心力ブースト付ローキ
ックをふくらはぎに入れた。

「あ、痛つつ!!」

そしてそのままバランスを崩し、追い討ちの地面に顔面激突。えび
ぞりになり、後ろに倒れ踵が琉杜の脳天に当り、二次災害。

「うつ、ぎあああ!!!!」

「まさかここまでいくとは・・・颯人、記録更新だな」

「あ、ああ」

「ふう」

颯人は汗を拭きつつ先に歩く。

「いい汗かいたね!」

「・・・うん」

颯人の後ろに魅菜と紅葉の女子2人組が笑顔の花を満開にさせていた。しかし、その後ろは大分五月蠅かった。

「弘太、てめえ！あの時わざとぶつけただろ！！」

「そんなわけあるか！！アレは葉殿が打った球が背中にあたっただいだ！」

「ちょい待ち！人のせいにすなや！アレは弘太はんが当てただけやんけ！！！」

雑音三角無法地帯（バカ3人組）が言い合いを激突させていた。

颯人はいつ凌がそこに加わり、雑音四角無法地帯になるのかと冷や冷やしていたが、凌は部長達のところへ礼を言いに行ったみたいだが、いつの間にか野球部に参加していた。

「い、いつの間に？」

「ある意味、アイツも馬鹿だな」

夕陽が山に顔を隠すまで続いた。颯人達を残して。

凌達と分かれ部屋に入る颯人だが、今はシャワーを浴びている。珍しく誰もいないので、シャワーの音だけが、暗い部屋に響く。

「ふ」

明りをつけ、ベッドに腰掛ける。右手には冷蔵庫から取り出した黒い清涼飲料水を、左手にはサンドイッチを持っている。
トントン。

扉を叩く音。

「……………どうぞ」

扉が開き、可愛らしく顔だけチョコツと出し、魅菜が来た。いつものサイドポニーではなく、ストレートになっていた。毛先がカールしている。どうやら湯上りのようだ。

「兄さん失礼しま、す、ね……………?」

颯人の格好を見た瞬間、魅菜の行動及び思考回路が停止した。颯人は上半身裸だった。

「き、きき、き、ききききき……………」

「どうした?猿みたいな声を出して?」

「きやややあああああ!!!!!!」

奇声を発した。

だが、集まることはない。

なぜなら魅菜がイノセントチルドレンのメンバーで発生もとが颯人の部屋だからだ。男子と女子の大方はまた馬鹿をやっていると勘違いする。

だから、来たとしてもイノセントチルドレンのメンバーぐらいになる。顔をリンゴやトマトみたいに真っ赤にさせ、左手で顔面を覆い、右指で颯人を指す。

「に、ににに、兄さん!!!!上!!!!」

「上？」

そう言つて、天井を見る。無論何もない。

「んん？・・・上には何もないぞ？」

「そ、そんな御決まりのボケはしなくていいから！！わ、わたしがいつ、いつ、言つてるのはじよ、じよじよじよ、上半身のことです！！！！」

「ん？ああ・・・悪い、悪い。そうだったな」

服を着る颯人。それを見届けて、安心した魅菜は安堵の溜息をつき、座布団に座る。

「はあゝ・・・ビツクリした」

「あのなゝ。たかが上半身裸を見ただけで叫ぶな」

「そ、それは叫びたくもなるよ！入ったら上半身裸なんて思わないもの」

「別に上半身だからってなんなんだ？下を見たわけじゃないだろ？第一、海やプールでは大抵上半身裸だろ？何が違う？」

「ち・・・違いますよ！場所に応じた格好でいてください！」

「・・・・・・・・さっきの格好でも問題ないと思うが、・・・・・・・・」

「何か言いましたか？」

「いや……それよりなにしに来た？」

「あつ……そうだった……アレ？」

何かに気付き、辺りを見回す。

ジェスチャーで探し物を表す。筆を走らせ、本を開いた。それがノートと理解するまで少し時間がかかった。

（そついやさつきまで何か持っていたな）

持っていたノートはさつきの騒動で何処かに飛ばしたらしい。颯人も辺りを見回す。それは簡単に見つかった。

窓の真下に散らばった本の屍。プリント類も乱雑していた。

「探し物はアレか？」

颯人の指差す方向へゆつくりと顔を流す。

「……きゃああああ！！！！な、なんで?!」

「お、ま、え、が……投げた」

「む……むう」

「ほらほら、唸ってないで拾えよ」

「手伝ってよ！」

「はいはい」

結局手伝うことになった。

妹の頼みは断れないのか、それとも下心があつてなのかは知らない。それでも颯人は魅菜と紅葉には優しくった。だが、それに気がつく者は凌一人だけだった。

「ほら」

「ん！ありがと」

「はあゝ．．．．．ところでそれ、なんだ？」

大事そうに抱えているノートを指差す。

そのノートは薄汚れていて年季が入っていた。

魅菜は力強く握り締める。反対にその表情は穏やかで、愛しいものを見つめる優しさが籠っていた。

「．．．．．宝、物．．．．．これは．．．私にとって掛け替えのない宝物。．．．．．あの頃の、唯一の証し」

「？」

「そ、それより！兄さん！聞きたいことがあるの！」

「な、なんだ．．．？」

その感情の変わり様にたじろぐ。颯人は昔から魅菜のこれにはついて行くことは苦手だった。もしこの状態の魅菜について行けば酷い目に合うのはいつも颯人だった。

例えば、ハイテンションで酔払いに喧嘩を売ったり、皆が恐れてい

る上級生に対して下剋上しようとして、宣戦布告をけしかけたりと何故か暴力沙汰に関わることしかなかった。その尻拭いは颯人の役目だった。それに沿って、喧嘩と言うより、防衛することで喧嘩が強くなっていた。グランドで見せた超低空遠心力ブースト付ドロップローキックはそれで生み出された技なのだ。

「兄さん！……………今日のテストどうだった？」

「あ？」

な質問に思考回路が凍った。

「だ・か・ら！今日の英語の簡易小テストどうだったって聞いているの！！」

「ああ……………そう言えばそんなのもあったな」

「そんなのもって……………まさか……………覚えないの？」

「ああ。あまりにも簡単で、内容なんて一つも記憶してない」

「……………う……………そ……………」

目を見開く。どうやら本当に意外だったようだ。

「嘘も何も、こんなことで嘘ついて何になる？」

さらりと言う颯人。少し泪目に、変わった。

「えっ……………ちょっ……………！！み、魅菜！ど、どうした！？」

「うっ」

眉を八の時にして俯く。唸ったままで話そうとしない。

「・・・・・・・・」

頭を掻いてなにかかける言葉がないか検索するが、何も浮かんでこない。

「あの、なんだ？・・・・・・・・まあ、気にすることねえよ。たかが簡易テストぐらい・・・・・・・・なんてことない・・・・・・・・うん。なんてないさー！」

魅菜は肩を振らせている。そして腹を押さえてしゃがみこんだ。

「み、魅菜ー！どうした！？腹、痛いのか？正露丸あったかな・・・」

震えが大きくなっていくに連れ、颯人の不安も倍加する。

「参ったな」

「・・・・・・・・つく、くく・・・・・・・・」

「く？」

「アハハハハハハ！ーつく、くクク・・・アッハハハハハハ！ー！お、おつかしいー！！イーヒヒヒ！・・・・・・・・ヒイ、ヒイ・・・・・・・・笑いすぎて・・・・・・・・お腹、痛い・・・・・・・・」

「・・・・・・・・魅菜・・テメエ・・まさか・・」

顔を赤らめ、動揺する。それに対して魅菜は目尻に涙を溜めている。

「魅菜！兄貴をおちよくるな！！」

「アッハハハハハハ！！・・・・・・・・フウ・・・・・・・・うん・・・・・・・・ごめんね兄さん。でも・・・・・・・・うれしかったよ？」

「ば、ばか」

その『馬鹿』はとても優しかった。

魅菜と2人の時にしか見せない颯人の別の顔。

それは兄妹以上の何かで、恋人以下の存在と言える。

颯人は魅菜を守り、魅菜に見守られて生きて来た。恐らく二人を繋ぐ幾多の鎖は、天の鎖より頑丈で断ち切ることは難しいのかも知れない。もし、断ち切られたとしても今の状態ならば、二人は時待たずとして崩れてゆくだろう。少なくとも颯人といつも彼等に接してメンバーのことを理甲斐していた凌には、それが理解出来ていただろう。

だからこそ、魅菜がこっちに編入することが分かっていたのかもしれない。

そう思いたい颯人。決められた道筋だとは思いたくはなかった。

「で？本当に何しに来たんだよ？」

「テストの答え合わせしようと思って」

「そうか。どれ、見せてみる」

「うん！」

五月蠅いながらも楽しい兄弟だけの時間が宵闇の一つの空間に存在していた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4051f/>

旋律の夢幻回廊～インフィニティ～

2010年10月28日04時32分発行